安曇野市の埋蔵文化財第８集

平成25年度
安曇野市埋蔵文化財調査報告書

穂高古墳群 G1 号墳（上原古墳）第３次・第４次発掘調査

2015. 3
安曇野市教育委員会

安曇野市の埋蔵文化財第８集

平成25年度
安曇野市埋蔵文化財調査報告書

穂高古墳群 G1 号墳（上原古墳）第３次・第４次発掘調査

2015. 3

安曇野市教育委員会

上原古墳墳丘裾東出土土器

上原古墳墳丘裾北西出土土器

上原古墳前庭部西出土土器

上原古墳出土金属製品

序

平成17年に旧５町村が合併し誕生した安曇野市は、本年10月をもって合併10周年を迎えます。一方、近年は遺跡内での個人住宅新築などの件数が増加しており、これらに伴う工事に際して行ってきた発掘調査等により、安曇野市の地中に眠っている歴史が少しずつ紐解かれています。

本書では、平成25年度に実施された試掘・工事立会等の調査及び平成14・15年度の史跡整備事業の際に実施した上原古墳（穂高古墳群Ｇ１号墳）調査成果をまとめました。

特に上原古墳については、昭和５年に発見されて以来、平成11年の調査を経て今日まで墳丘や石室に関する詳細な記録が公開されていませんでしたが、今回、本書に実測図を掲載することができました。遺物については、出土した須恵器類及び金属製品等を整理し報告しています。このうち金属製品については、保存処理業務の過程で金張りや銀張りの馬具が確認されました。このことから、上原古墳の被葬者が高い地位を持っていたのではないかと推測されます。現在、上原古墳は公園として整備されていますので、たくさんの皆様に訪れていただければ幸甚に存じます。併せて、今後も貴重な埋蔵文化財が適正に保護されていくことを願っています。

最後になりますが、本書をまとめるにあたり多くの皆様、諸機関にご協力とご指導を賜りました。この場をかりて、厚く御礼申し上げます。本書掲載の調査成果が多くの市民に活用され、広く安曇野の歴史・文化解明に役立つことを祈念し序とさせていただきます。

平成27年（2015）３月

安曇野市教育委員会
教育長　橋渡　勝也

例　言

1　本書は長野県安曇野市で平成25年度に実施された埋蔵文化財保護事業及び平成13～15年度に実施した穂高古墳群G１号墳（上原古墳）（以下、「上原古墳」とする。）第３次・第４次発掘調査の報告書である。

2　本書掲載の調査は、安曇野市教育委員会及び旧穂高町教育委員会が実施した。調査体制は各章のとおりである。

3　本書の編集は安曇野市教育委員会事務局が行った。執筆・編集は山下泰永、土屋和章が担当した。

4　本書で使用した主な引用・参考文献は巻末に一括して掲載した。

5　本書掲載の調査に関する出土遺物及び事務書類、記録類は安曇野市教育委員会が保管している。

6　調査全般にわたり以下の方々からご指導・ご協力いただきました。記して感謝いたします。（敬称略・五十音順）

安曇野市豊科郷土博物館、大澤　慶哲、桐原　健、重野　昭茂、長野県教育委員会、畑　大介、藤澤　明、百瀬　新治、森　義直、山田　真一、（公財）山梨文化財研究所

凡　例

1　本書では、平成17年10月１日の町村合併より前の旧郡名・旧町村名について「旧」を省略し、「南安曇郡」、「穂高町」のように表記した。

2　穂高古墳群の呼称については学史的に有明古墳群や西穂高古墳群といった概念もあるが、本書では穂高町域に存在する古墳群及び単独墳を穂高古墳群として捉える。詳細は第２章に記した。

3　発掘調査及び整理作業に際し、遺跡略号として遺跡名のアルファベットを遺物注記等に使用した。
上原古墳：UK

4　遺構・遺物の法量の表示で、残存箇所のみを計測した場合は（　　）で示した。

5　本書実測図で遺物は次のように表現した。また、縮尺は各図に示した。
土師器：断面無地　　須恵器：断面黒塗　　黒色処理：トーン（薄）　灰釉陶器：断面トーン

6　土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。

目　次

序
例言・凡例
目次・挿図目次・表目次・図版・写真図版
第１章　平成25年度埋蔵文化財保護事業…… 1
　1　埋蔵文化財保護事業の概要…… 1
　2　試掘調査等…… 8
第２章　穂高古墳群Ｇ１号墳（上原古墳）第３次・第４次発掘調査 ……19
　1　調査にいたる経緯……19
　2　発掘調査・整理作業の経過……22
　3　遺跡の位置と環境……24
　4　調査の概要……41
　5　遺構……44
　6　遺物……46
　7　調査の総括……50
　付表……55
　図版
　写真図版
引用・参考文献
報告書抄録

挿図目次

第１図　平成25年度発掘調査等位置図（北部）…… 2
第２図　平成25年度発掘調査等位置図（南部）…… 4
第３図　野辺沢遺跡試掘位置図…… 8
第４図　潮神明宮前遺跡試掘位置図…… 9
第５図　潮神明宮前遺跡試掘トレンチ配置図…10
第６図　潮神明宮前遺跡試掘出土土器……10
第７図　経営体育成基盤整備事業鳥川地区試掘位置図……11
第８図　藤塚遺跡試掘位置図……12
第９図　原村遺跡試掘位置図……13
第10図　藤塚遺跡試掘位置図……14
第11図　北村遺跡試掘位置図……15
第12図　宮前遺跡試掘位置図……16
第13図　ほうろく屋敷遺跡試掘位置図……17
第14図　穂高神社境内遺跡試掘位置図……18
第15図　上原古墳第２次調査トレンチ配置図…19
第16図　上原古墳位置図……25
第17図　発掘調査位置図……25
第18図　穂高古墳群古墳分布図……33
第19図　昭和５年発掘調査時の石室（狼田1931）……35
第20図　昭和５年発掘調査時の石室（狼田1933）……37
第21図　昭和５年発掘調査時の遺物出土状況…37
第22図　上原古墳出土玉類・金属器……38
第23図　上原古墳墳丘堆積状況図……43
第24図　上原古墳遺物出土位置図……46

表目次

第１表　平成25年度発掘調査等一覧…… 6
第２表　潮神明宮前遺跡試掘出土土器観察表…10
第３表　上原古墳保存整備計画……21
第４表　整備のための調査……22
第５表　遺物整理作業及び報告書作成……23
第６表　『南安曇郡誌』（1923）……27
第７表　『信濃史料』（1956）……28
第８表　『南安曇郡誌』（1968）……28
第９表　『穂高町の古墳』（1970）……29
第10表　『長野県史』（1981）……30
第11表　『穂高町の古墳群とその人々』(1989)……31
第12表　『穂高町誌』（1991）……32
第13表　上原古墳発掘調査記録……34
第14表　南安曇郡穂高町上原古墳発掘に就て（狼田1931）……35
第15表　上原古墳出土玉類・金属器一覧……39
第16表　上原古墳注記対照表……42
第17表　出土土器の重量……47
第18表　墳丘規模と石室の関係……50
第19表　上原古墳の変遷……54

図　版

図版１　上原古墳位置図
図版２　上原古墳平面図
図版３　上原古墳トレンチセクション図
図版４　石室実測図
図版５　墳丘裾東出土土器
図版６　墳丘裾北西出土土器
図版７　前庭部西出土土器１
図版８　前庭部西出土土器２
図版９　前庭部西出土土器３ほか
図版10　金属製品・石製品

写真図版

写真図版１　１　石室（南から）
写真図版２　２　石室（南から）
　　３　石室（西から）
写真図版３　４　上原古墳の南50mの地層
　　５　Ｔ２調査状況（南から）
　　６　Ｔ２西壁堆積状況
　　７　Ｔ５東壁堆積状況
　　８　前庭部西遺物出土状況
　　９　前庭部西遺物出土状況
　　10　前庭部西遺物出土状況
　　11　前庭部西遺物出土状況
写真図版４　12　墳丘裾北西遺物出土状況
　　13　墳丘裾北西遺物出土状況
　　14　墳丘裾東遺物出土状況
　　15　前庭部西遺物出土状況
　　16　石室埋戻し状況
　　17　石室埋戻し状況
　　18　墳丘整備完了
　　19　昭和５年調査出土遺物
　　（穂高神社所蔵）
写真図版５　墳丘裾東出土土器
写真図版６　墳丘裾北西出土土器
写真図版７　前庭部西出土土器１
写真図版８　前庭部西出土土器２
写真図版９　前庭部西出土土器３ほか
写真図版10　金属製品・石製品

第１章　平成25年度埋蔵文化財保護事業

１　埋蔵文化財保護事業の概要

事務局の体制

平成25年度の安曇野市における埋蔵文化財保護事業は、教育委員会事務局文化課文化財保護係が担当した。体制は次のとおりである。

事務局　安曇野市教育委員会事務局　文化課

三澤　良彦（文化課長）、山下　泰永（文化財保護係長）

逸見　大悟、土屋　和章、丸山　五月（以上、文化財保護係）

地理的環境と遺跡の立地

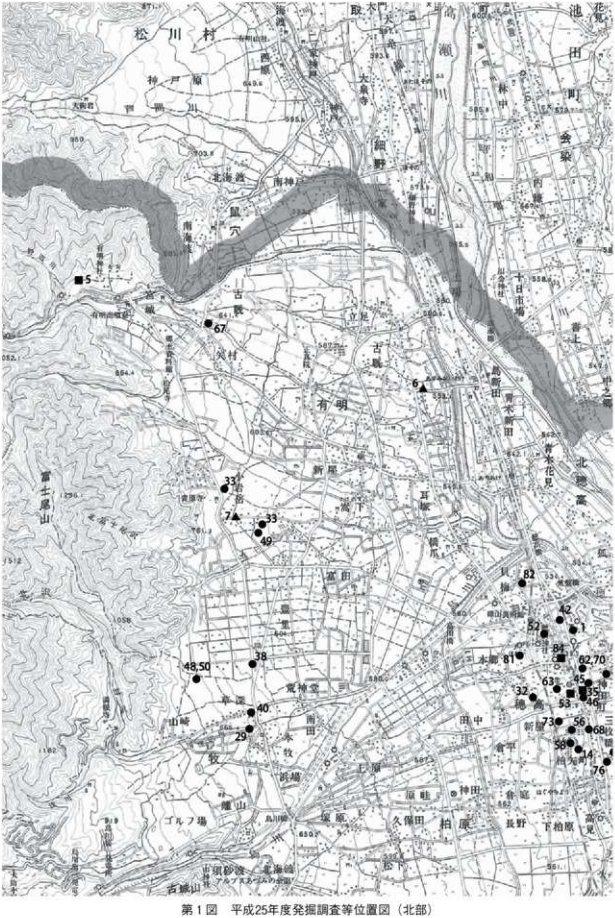
安曇野市は平成17年（2005）10月１日に豊科町・穂高町・三郷村・堀金村・明科町の５町村が合併して誕生した市で、長野県のほぼ中央部に位置し、北は大町市、松川村、池田町、生坂村、筑北村、南は松本市に隣接する。地形的には松本盆地の中ほどにあり、西は飛騨山脈、東は筑摩山地に囲まれる。松本盆地は構造性の盆地で、縁辺部から流れる複数の河川が運搬した堆積物により形成されている。

安曇野市内に所在する遺跡は現在約400箇所が周知の埋蔵文化財包蔵地となっており、確認されている時代としては縄文時代早期から現代に至る。縄文時代の遺跡は、主として北アルプス山麓の扇状地扇頂付近及び犀川以東の河岸段丘上に多く立地しており、過去の調査からは縄文中期に隆盛を極めたことがわかる。弥生時代になると遺跡数は減少し、集落の立地も扇状地扇端へ移る。生業形態の変化が遺跡立地の変化に影響している可能性があり、この集落立地は基本的に現代まで踏襲されている。安曇野市では前・中期の古墳は現在までに確認されておらず、後期の群集墳が北アルプス山麓や明科地域に分布する。奈良時代以降は、前代までの立地を踏襲するように犀川以西の扇端と犀川以東の河岸段丘上に集落が営まれるなか、明科地域では明科廃寺と呼称される古代寺院の存在が確認されている。また、豊科田沢の山間部一帯から隣接する松本市域にかけて須恵器窯群が築かれている。

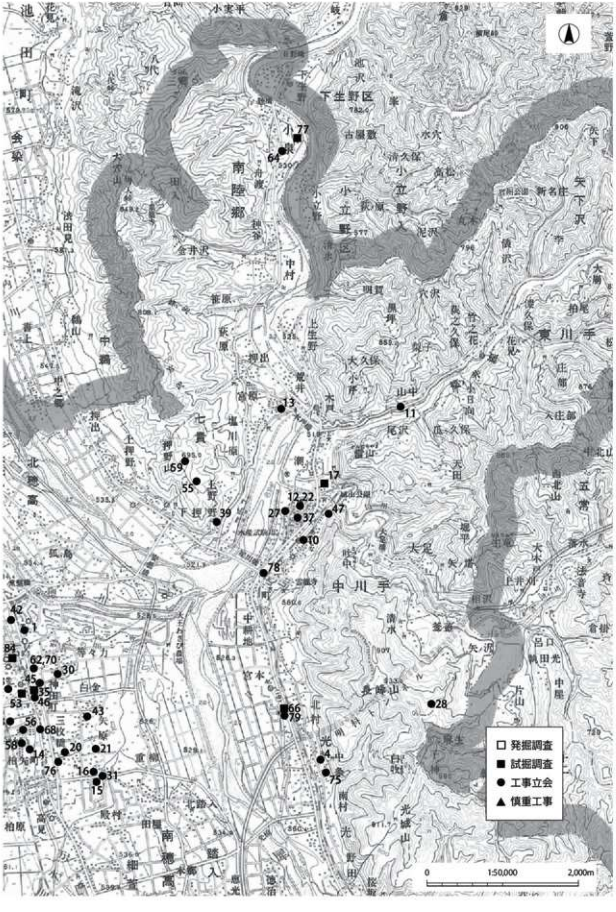
平成25年度の概要

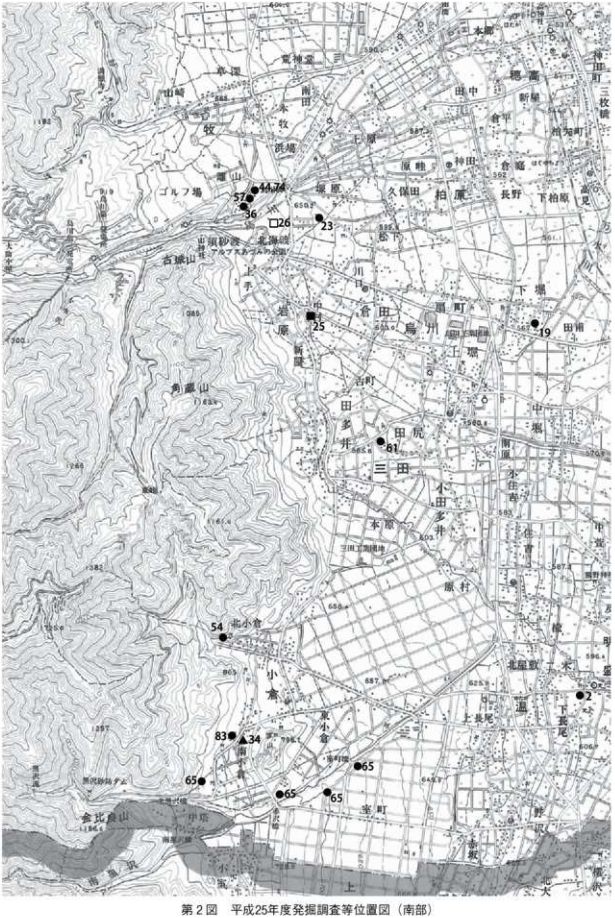
平成25年度の安曇野市における発掘調査等の一覧は第１表のとおりで全84件であった。このうち安曇野市教育委員会が主体となって実施した発掘調査等は合計83件で、内訳は発掘調査０件、試掘調査10件、工事立会70件、慎重工事３件となっている。それぞれの位置は第１図に示す。試掘調査の概要は次項で取り上げた。

また、安曇野市教育委員会が調査主体となった埋蔵文化財保護事業のほかには、國學院大學文学部考古学研究室によって穂高古墳群F９号墳の学術発掘が実施されている（吉田他編2014）。

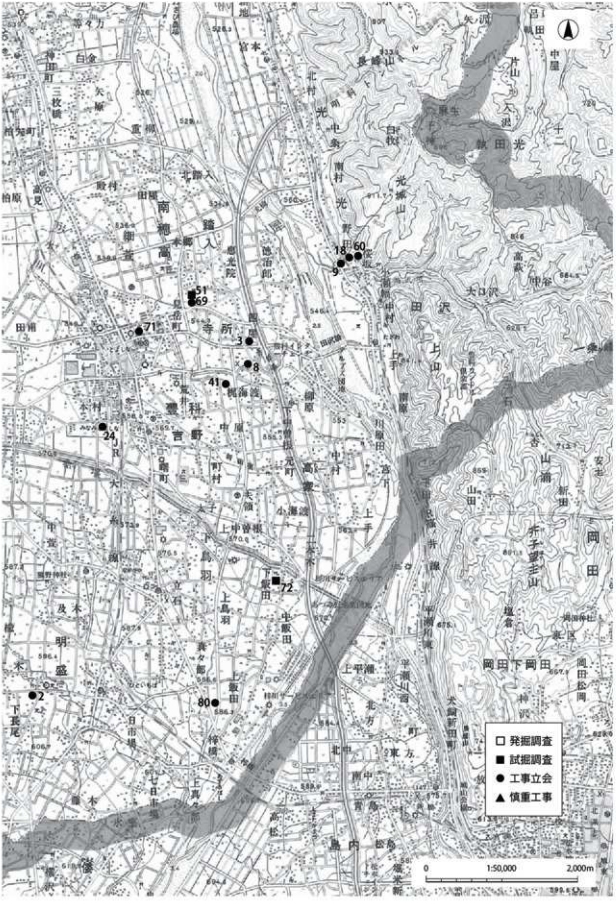


第１図　平成25年度発掘調査等位置図（北部）


□ 発掘調査
■ 試掘調査
● 工事立会
▲ 慎重工事
0
1:50,000
2,000m
中川字
南陸郷
東川字
下生野区
小立野区
中村
宮本
北村
南郷
高畑
柏原
白金
中島
北陸高
小立野
小立野入
中村
中川
小
77
64
13
11
59
55
39
17
12,22
27
37
47
10
78
42
1
84
62,70
30
45
35
53
46
43
56
68
58
44
20
21
76
16
31
15
66
79
28



第２図　平成25年度発掘調査等位置図（南部）


□ 発掘調査
■ 試掘調査
● 工事立会
▲ 慎重工事
0
1:50,000
2,000m

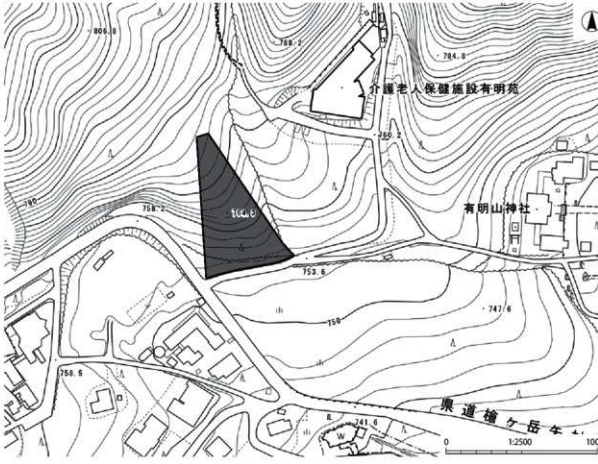
第１表　平成25年度発掘調査等一覧

No.	調査	遺跡	所在地	工事目的等	調査日_自	調査日_至	調査主体
●1	工事立会	等々力町中上中下遺跡	穂高4651番１	その他開発	20130401	20130401	市教委
●2	工事立会	三柱神社東遺跡	三郷明盛4712番８	個人住宅	20130409	20130409	市教委
●3	工事立会	上手木戸遺跡	豊科南穂高148番８外２筆	店舗	20130425	20130425	市教委
●4	工事立会	中条遺跡	明科光680番１	個人住宅	20130425	20130425	市教委
■5	試掘調査	野辺沢遺跡	穂高有明7255番３	その他の建物	20130508	20130508	市教委
▲6	慎重工事	古屋氏館跡	穂高有明6156番先外	道路	20130510	20130510	市教委
▲7	慎重工事	小岩嶽下木戸遺跡	穂高有明1864番先外	道路	20130510	20130510	市教委
●8	工事立会	上手木戸遺跡	豊科南穂高166番１外２筆	宅地造成	20130523	20130523	市教委
●9	工事立会	町田遺跡	豊科田沢4591番１	個人住宅	20130601	20130601	市教委
●10	工事立会	上郷遺跡	明科中川手3570番１外２筆	個人住宅	20130603	20130603	市教委
●11	工事立会	山中殿屋敷	明科東川手12804番外	道路	20130607	20130607	市教委
●12	工事立会	栄町遺跡	明科中川手6824番外	道路	20130611	20130621	市教委
●13	工事立会	みどりヶ丘遺跡	明科七貴7222番39	個人住宅	20130607	20130625	市教委
●14	工事立会	八ツ口遺跡	穂高柏原1587番１外２筆	宅地造成	20130701	20130701	市教委
●15	工事立会	馬場街道遺跡	穂高745番１	その他の建物	20130712	20130712	市教委
●16	工事立会	馬場街道遺跡	穂高843番１外２筆	店舗	20130711	20130716	市教委
■17	試掘調査	潮神明宮前遺跡	明科東川手536番２	個人住宅	20130716	20130716	市教委
●18	工事立会	町田遺跡	豊科田沢4642番３外６筆	個人住宅	20130717	20130717	市教委
●19	工事立会	十兵衛屋敷遺跡	堀金烏川4768番２	その他の建物	20130722	20130722	市教委
●20	工事立会	矢原権現池遺跡	穂高1351番１	個人住宅	20130726	20130726	市教委
●21	工事立会	正烏遺跡	穂高1115番６外２筆	個人住宅	20130801	20130801	市教委
●22	工事立会	栄町遺跡	明科中川手6824番１先他	道路	20121205	20130805	市教委
●23	工事立会	塚原遺跡	穂高柏原3759番３	個人住宅	20130626	20130805	市教委
●24	工事立会	成相氏館跡	豊科1907番18外２筆	個人住宅	20130807	20130807	市教委
■25	試掘調査	遺跡外	堀金烏川1083番１外	農業基盤整備事業	20130807	20130808	市教委
□26	発掘調査	穂高古墳群Ｆ９号墳	穂高柏原3653番	学術研究	20130803	20130812	國學院大學
●27	工事立会	本町遺跡	明科中川手3921番３	個人住宅	20130816	20130816	市教委
●28	工事立会	天平遺跡	明科光2621番	ガス・水道・電気等	20130808	20130823	市教委
●29	工事立会	新林遺跡	穂高牧1898番14先外	その他開発	20130827	20130827	市教委
●30	工事立会	北才の神遺跡	穂高2823番１	個人住宅	20130827	20130827	市教委
●31	工事立会	馬場街道遺跡	穂高742番付近	道路	20130904	20130904	市教委
●32	工事立会	南原遺跡	穂高9303番	個人住宅	20130918	20130918	市教委
●33	工事立会	小岩嶽下木戸遺跡	穂高有明275番先外	その他開発	20130924	20130924	市教委
▲34	慎重工事	中沢遺跡	三郷小倉1588番１	公園造成	20131004	20131004	市教委
■35	試掘調査	藤塚遺跡	穂高2467番４外１筆	集合住宅	20131008	20131008	市教委
●36	工事立会	堰下遺跡	穂高牧158番３先外	その他開発	20131010	20131010	市教委
●37	工事立会	馬町遺跡	明科中川手3958番２先外	道路	20131015	20131015	市教委
●38	工事立会	有明中上遺跡	穂高有明8161番４先外	その他開発	20131022	20131022	市教委
●39	工事立会	やしき遺跡	明科七貴6178番外４筆	道路	20131016	20131022	市教委
●40	工事立会	草深遺跡	穂高牧943番２先外	その他開発	20131010	20131028	市教委
●41	工事立会	梶海渡遺跡	豊科3795番１	その他の建物	20131028	20131028	市教委
●42	工事立会	等々力町中上中下遺跡	穂高4601番３外１筆	その他開発	20131028	20131028	市教委
●43	工事立会	堀之内遺跡	穂高1700番先	道路	20131029	20131029	市教委

No.	調査	遺跡	所在地	工事目的等	調査日_自	調査日_至	調査主体
●44	工事立会	穂高古墳群Ｅ６・Ｅ７・Ｅ８号墳	穂高牧14番３先外	道路	20131030	20131030	市教委
●45	工事立会	北才の神遺跡	穂高1816番１付近外	道路	20130904	20131101	市教委
●46	工事立会	藤塚遺跡	穂高2467番４外２筆	集合住宅	20131101	20131101	市教委
●47	工事立会	上郷遺跡	明科中川手4087番１	その他開発	20131016	20131105	市教委
●48	工事立会	寺島畑遺跡	穂高牧1490番３	個人住宅	20131107	20131107	市教委
●49	工事立会	小岩嶽下木戸遺跡	穂高有明2991番12先外	ガス・水道・電気等	20131107	20131107	市教委
●50	工事立会	寺島畑遺跡	穂高牧1490番５	個人住宅	20131107	20131107	市教委
■51	試掘調査	原村遺跡	豊科南穂高839番１	宅地造成	20131111	20131111	市教委
●52	工事立会	穂高神社境内遺跡	穂高5960番３外４筆	公園造成	20131113	20131113	市教委
■53	試掘調査	藤塚遺跡	穂高6802番	その他の建物	20131114	20131114	市教委
●54	工事立会	北小倉１号・２号塚	三郷小倉3451番１外２筆	その他農業関連事業	20131125	20131125	市教委
●55	工事立会	押野山遺跡	明科七貴6433番外２筆	その他開発	20131127	20131127	市教委
●56	工事立会	追堀遺跡	穂高柏原1674番９	個人住宅	20131128	20131128	市教委
●57	工事立会	堰下遺跡	穂高牧2276番１先外	ガス・水道・電気等	20131010	20131204	市教委
●58	工事立会	追堀遺跡	穂高柏原1649番16	個人住宅	20131206	20131206	市教委
●59	工事立会	押野山遺跡	明科七貴6791番１	その他の建物	20131216	20131216	市教委
●60	工事立会	町田遺跡	豊科田沢4678番２外９筆	その他開発	20130125	20131217	市教委
●61	工事立会	なかじま遺跡	堀金三田995番１	個人住宅	20131224	20131224	市教委
●62	工事立会	北才の神遺跡	穂高2537番２の一部	個人住宅	20131224	20131224	市教委
●63	工事立会	藤塚遺跡	穂高6814番１	宅地造成	20140110	20140110	市教委
●64	工事立会	北原遺跡	明科南陸郷2825番	個人住宅	20131219	20140128	市教委
●65	工事立会	黒沢川右岸遺跡ほか	三郷小倉5468番３先外	ガス・水道・電気等	20140108	20140129	市教委
■66	試掘調査	北村遺跡	明科光113番外１筆	その他開発	20140129	20140129	市教委
●67	工事立会	穂高古墳群Ａ７号墳	穂高有明7348番１	その他開発	20131204	20140130	市教委
●68	工事立会	三枚橋遺跡	穂高1476番１付近	道路	20140130	20140130	市教委
●69	工事立会	原村遺跡	豊科南穂高839番１	宅地造成	20140203	20140203	市教委
●70	工事立会	北才の神遺跡	穂高2537番３	個人住宅	20140203	20140203	市教委
●71	工事立会	法蔵寺館跡	豊科5719番	公園造成	20140205	20140205	市教委
■72	試掘調査	宮前遺跡	豊科高家747番１	その他開発	20140206	20140206	市教委
●73	工事立会	追堀遺跡	穂高柏原1706番３	その他開発	20140211	20140211	市教委
●74	工事立会	穂高古墳群Ｅ６号墳	穂高牧29番１	公園造成	20140212	20140212	市教委
●75	工事立会	中条遺跡	明科光685番５	道路	20140212	20140212	市教委
●76	工事立会	矢原権現池遺跡	穂高1012番付近	道路	20140213	20140213	市教委
■77	試掘調査	ほうろく屋敷遺跡	明科南陸郷3126番１	その他の建物	20140213	20140213	市教委
●78	工事立会	町屋敷遺跡	明科中川手2731番１外	道路	20140217	20140217	市教委
●79	工事立会	北村遺跡	明科光113番外１筆	その他開発	20140220	20140220	市教委
●80	工事立会	真々部中下遺跡	豊科高家5106番２外３筆	店舗	20140221	20140221	市教委
●81	工事立会	宮脇遺跡	穂高10112番２	個人住宅	20140225	20140225	市教委
●82	工事立会	貝梅道上遺跡	穂高5028番９	個人住宅	20140320	20140320	市教委
●83	工事立会	中沢遺跡	三郷小倉1590番先外	河川	20140320	20140320	市教委
■84	試掘調査	穂高神社境内遺跡	穂高6658番	その他の建物	20140328	20140328	市教委

2　試掘調査等

野辺沢遺跡（第１表■５）



第３図　野辺沢遺跡試掘位置図

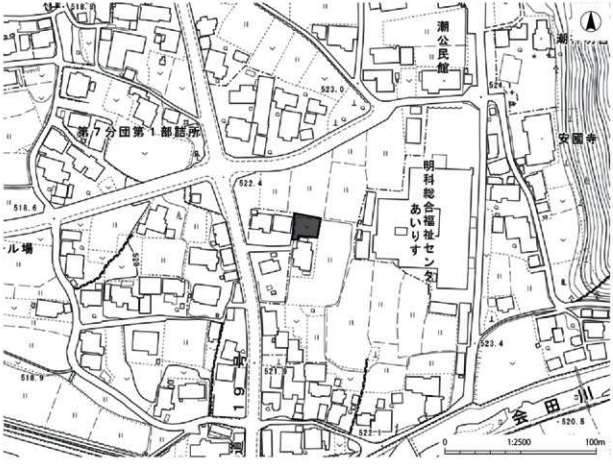
所　在　地	安曇野市穂高有明7255番３
調 査 期 間	平成25年（2013）５月８日
調 査 面 積	８㎡
調 査 契 機	宿泊施設

概　要

今回の調査では、宿泊施設建設予定地に調査区を設定し埋蔵文化財の有無を確認した。調査地は山間部の斜面で、調査前は山林であったため遺構等の存在は不明確であった。

樹木伐採後に土層観察用の調査区を２箇所設置し調査を実施した。この結果、両地点とも地表面から約60cm厚の黒色腐植土、その下層に花崗岩風化砂礫という堆積状況であることが確認できた。なお、今回の試掘調査では遺構・遺物とも確認していない。

潮（うしおかしんめいぐうさま） 神明宮前遺跡（第１表■17）



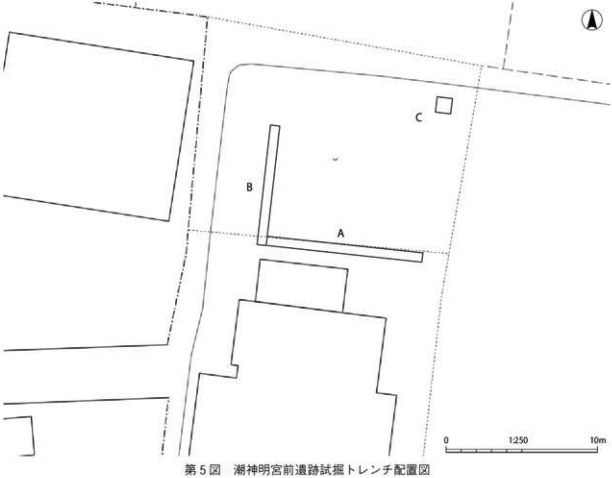
第４図　潮神明宮前遺跡試掘位置図

所　在　地	安曇野市明科東川手536番２
調 査 期 間	平成25年（2013）７月16日
調 査 面 積	14㎡
調 査 契 機	個人住宅

概　要

調査地は犀川右岸の河岸段丘上に所在する古代の集落跡で、旧明科町教育委員会が主体となり過去に２次にわたる発掘調査が実施されている（明科町教委2005）。また、一帯は潮古墳群とよばれる古墳時代後期の円墳を主体とした古墳群の所在地でもあり、過去の発掘では平安時代の集落跡だけでなく埋没した古墳も検出され調査されている。

今回の調査では、個人住宅建設予定地に２箇所のトレンチ（A・Bトレンチ）及び１箇所の土層観察地点（C地点）を設定し埋蔵文化財の有無を確認した。この結果、地表下40～50cmで遺物包含層上面を検出し、この包含層の下からは遺構と考えられるプランを検出した。包含層中の出土土器から平安時代の集落跡の一部と考えられる。このため、安曇野市教育委員会では開発事業者と保護協議を実施し遺跡保護方法について協議を継続している。



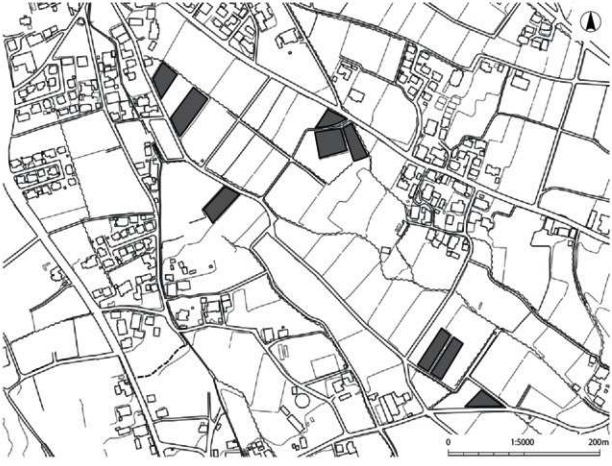
第５図　潮神明宮前遺跡試掘トレンチ配置図

第６図　潮神明宮前遺跡試掘出土土器

第２表　潮神明宮前遺跡試掘出土土器観察表

No.	出土位置	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頸部径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
										外面	内面	底部
1	Bトレンチ	土師器	埦	口縁部～底部	14.3	－	14.3	7.9	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り+ナデ
2	Bトレンチ	黒色土器	埦	体部下半～底部	不明	－	(8.6)	8.0	(1.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り+ナデ
3	Bトレンチ	灰釉陶器	椀	体部下半～底部	不明	－	(11.4)	7.9	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
4	Bトレンチ	須恵器	壺	体部下半～底部	不明	不明	(11.0)	8.3	(3.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り

経営体育成基盤整備事業烏川地区（遺跡外）（第１表■25）



第７図　経営体育成基盤整備事業烏川地区試掘位置図

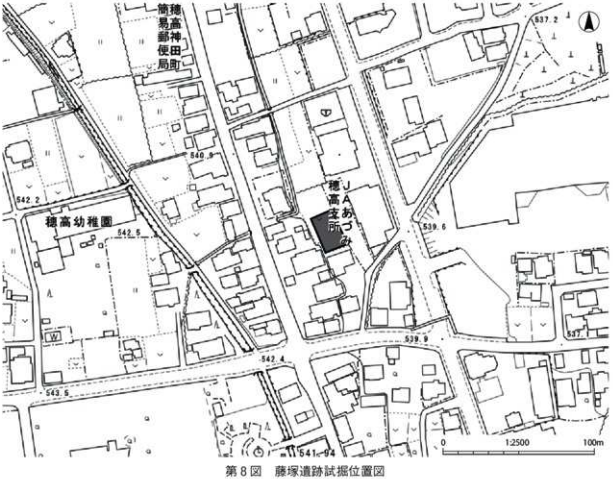
所　在　地	安曇野市堀金烏川1083番１外
調 査 期 間	平成25年（2013）８月７日～平成25年（2013）８月８日
調 査 面 積	67㎡
調 査 契 機	農業基盤整備事業

概　要

調査地は堀金烏川で実施される経営体育成基盤整備事業烏川地区の事業地内で、立地は烏川扇状地の扇央部にあたる。基盤整備事業は複数年で実施され、事業地は広大であるが周知の埋蔵文化財包蔵地はほとんど存在していない。このため、未確認の遺跡が存在する可能性があり、事業者と協議を重ねて事業地内で掘削可能な農地について試掘調査を実施した。

今回の調査では、13箇所のトレンチを設定し埋蔵文化財の有無を確認した。この結果、調査範囲内北側及び東側のトレンチでは基盤と考えられる褐色砂礫層よりも上層に炭化物細片を含有する砂質シルト層を確認したが、この層中で遺構・遺物等は確認していない。また、この層以外に人為的な痕跡が認められる土層は検出されなかった。

藤塚遺跡（第１表■35）



第８図　藤塚遺跡試掘位置図

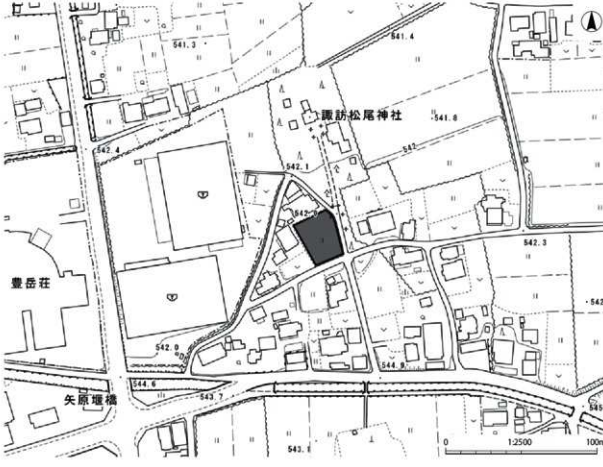
所　在　地	安曇野市穂高2467番４外
調 査 期 間	平成25年（2013）10月８日
調 査 面 積	12㎡
調 査 契 機	集合住宅

概　要

藤塚遺跡は烏川扇状地の扇央から扇端付近の一帯に所在する古代の集落跡で、過去の発掘調査では古墳時代後期及び奈良・平安時代の集落跡が確認されている（穂高町誌編纂委員会編1991、安曇野市教委2009）。

今回の調査では、集合住宅建設予定地に２箇所のトレンチを設定し埋蔵文化財の有無を確認した。深度100cm（一部120cm）まで調査した結果、周辺で古代の遺構の上面包含層となっている酸化鉄含有層が地表下50～60cmで確認されたが、遺物・炭化物は確認できず、この層より下層からも遺構等は確認されなかった。このため、調査地で地表下100cm程度までの掘削を行う土木工事では埋蔵文化財に影響を与える可能性はないと判断される。

原村遺跡（第１表■51）



第９図　原村遺跡試掘位置図

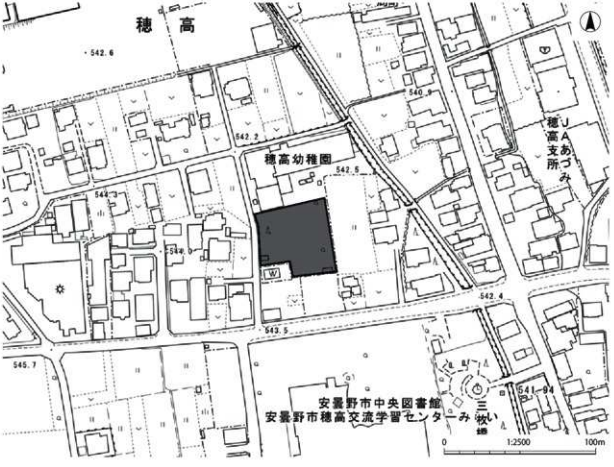
所　在　地	安曇野市豊科南穂高839番１
調 査 期 間	平成25年（2013）11月11日
調 査 面 積	14㎡
調 査 契 機	宅地造成

概　要

原村遺跡は犀川左岸の氾濫原の微高地上に所在する平安時代の遺物散布地である。この遺跡で本発掘調査が実施された記録はなく遺構等の分布や残存状況は不明確であった。このため事業者と協議を重ね、宅地造成工事に先立ち試掘調査を実施して施工地での遺構の有無等を調査することとなった。

今回の調査では、工事予定地に４箇所のトレンチを設定し埋蔵文化財の有無を確認した。深度100cm（一部110cm）まで調査した結果、調査地の大部分は自然堆積による砂礫層であることが確認できた。ただし、今回の調査で最も東に設定したトレンチからはシルト層が検出された。過去に遺物が表面採集された位置も今回の調査地点より東方であるため、遺構等は今回の調査地点より東方の一帯に分布する可能性がある。

藤塚遺跡（第１表■53）



第10図　藤塚遺跡試掘位置図

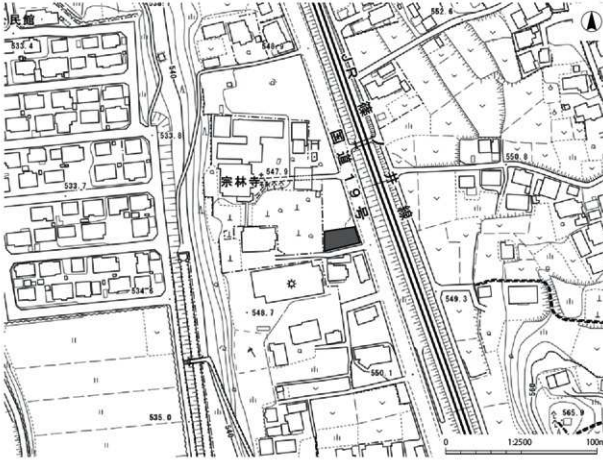
所　在　地	安曇野市穂高6802番
調 査 期 間	平成25年（2013）11月14日
調 査 面 積	40㎡
調 査 契 機	幼稚園仮園舎

概　要

藤塚遺跡は烏川扇状地の扇央から扇端付近にあたる一帯に所在する古代の集落跡で、過去の発掘調査では古墳時代後期及び奈良・平安時代の集落跡が確認されている（穂高町誌編纂委員会編1991、安曇野市教委2009）。

今回の調査では、幼稚園仮園舎建設予定地（調査時は園庭）に４箇所のトレンチを設定し埋蔵文化財の有無を確認した。深度200cmまで調査した結果、調査地内東方のトレンチでは地表下100cm以深に土器細片や炭化物細片を包含する砂質シルト層が薄く堆積していた。また、西方のトレンチでは地表下50～70cmに土器微細破片を包含する遺物包含層が確認された。この層に包含される土器破片はいずれも微細で摩耗しているため一次堆積ではないと判断される。

北村遺跡（第１表■66）



第11図　北村遺跡試掘位置図

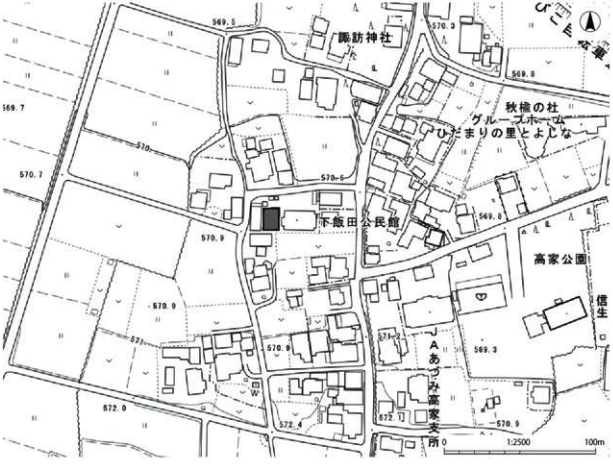
所　在　地	安曇野市明科光113番外
調 査 期 間	平成26年（2014）１月29日
調 査 面 積	24㎡
調 査 契 機	消防水利設備

概　要

北村遺跡は犀川右岸の河岸段丘上に所在する縄文時代から近世にかけての集落跡である。本遺跡では中央自動車道長野線建設に際し、昭和62～63年度にかけて長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施されている（長野県埋文センター 1993）。

今回の調査では、消防水利設備設置位置に１箇所のトレンチを設定し埋蔵文化財の有無を確認した。深度約150cmまで調査した結果、地表面から90cmは現代の土層、その下に約30cmの粘土質シルト層、砂礫層という堆積になっていた。このうち、粘土質シルト層には部分的に炭化物細片及び土器微細片が包含されていたが、採取できる量と大きさではなかった。この層中では遺構の検出も試みたが、確認されなかった。

宮前遺跡（第１表■72）



第12図　宮前遺跡試掘位置図

所　在　地	安曇野市豊科高家747番１
調 査 期 間	平成26年（2014）２月６日
調 査 面 積	７㎡
調 査 契 機	消防水利設備

概　要

宮前遺跡は犀川左岸の氾濫原の微高地に所在する平安時代の遺物散布地である。この遺跡では本格的な発掘調査が実施された記録はないため、消防水利設備設置に先立ち施工地に遺構等が存在するか確認する必要があり試掘調査を実施した。

試掘調査では、消防水利設備設置箇所に２箇所のトレンチを設定し埋蔵文化財の有無を確認した。深度約120cmまで調査した結果、地表面から30cmは現代の造成土層、その下に30～40cm厚の旧耕作土、さらに下層に40～50cm厚の砂礫主体層という層序になっていた。精査の結果、いずれの層からも遺構・遺物は検出されなかった。

ほうろく屋敷遺跡（第１表■77）

第13図　ほうろく屋敷遺跡試掘位置図

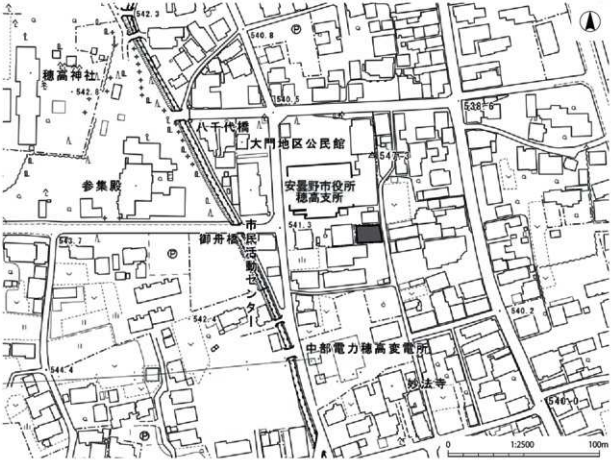
所　在　地	安曇野市明科南陸郷3126番１
調 査 期 間	平成26年（2014）２月13日
調 査 面 積	７㎡
調 査 契 機	物置

概　要

ほうろく屋敷遺跡は犀川左岸の河岸段丘上に所在する縄文・弥生時代及び平安時代の集落跡である。この遺跡では現在までに４次にわたる発掘が実施されており、当該期の集落が調査されている（明科町教委1991、2001）。

今回の試掘調査地点は過去の発掘調査地点よりも東側であり、遺構等の分布は不明確な場所であった。調査では２箇所のトレンチを設定し埋蔵文化財の有無を確認した。深度約110cmまで調査した結果、地表下50～70cmの範囲で表土及びその下層の砂質シルト層から摩耗が著しい土器微細片が出土したが、遺構は確認されなかった。また、これより深い層は河川作用の堆積による均質な砂層で遺構・遺物は存在していない。このことから、本遺跡の集落域は今回の試掘調査地点より西方に広がることが確認できた。

穂高神社境内遺跡（第１表■84）



第14図　穂高神社境内遺跡試掘位置図

所　在　地	安曇野市穂高6658番
調 査 期 間	平成26年（2014）３月28日
調 査 面 積	12㎡
調 査 契 機	公共施設

概　要

穂高神社境内遺跡は烏川扇状地の扇央付近に所在する弥生時代の集落跡である。この遺跡では現在までに本格的な発掘調査が実施された記録がないため、遺構等の分布や残存状況が不明確であった。

今回の試掘調査では２箇所のトレンチを設定し埋蔵文化財の有無を確認した。深度約200cmまで調査した結果、地表下130cm以深に須恵器を包含する暗褐色砂質シルト層が存在することが確認された。出土した須恵器は甕の体部破片であるため詳細な時期は判明していない。この層は粉末状の炭化物も包含しているため、付近に古代の遺構等が存在する可能性が高い。

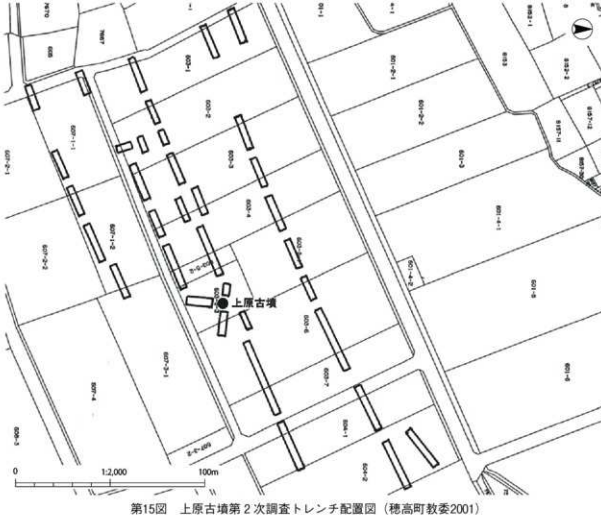
本件開発事業については、試掘調査の結果をふまえ事業者と協議継続中である。

第２章　穂高古墳群Ｇ１号墳（上原古墳）第３次・第４次発掘調査

１　調査にいたる経緯

(1)　調査にいたる経緯

平成８年（1996）から開始された「担い手育成基盤整備事業　穂高西部地区」に先立ち、事業地内に上原古墳が所在することから、穂高町教育委員会では地元及び松本地方事務所と上原古墳の保存方法について協議を実施した。協議の中で、上原古墳周辺に未知の古墳が埋没している可能性が指摘され、平成10年度に第２次調査として試掘調査が実施された（穂高町教委2001a）。調査の結果、事業地内において上原古墳以外の古墳は確認されず、保存に向けて協議が継続された。この段階で、上原古墳に関する詳細な墳丘実測図及び石室実測図がなかったため保存整備計画策定に向けて石室・墳丘の清掃及び実測図作成を目的として第３次・第４次発掘調査が実施された。



第15図　上原古墳第２次調査トレンチ配置図（穂高町教委2001）

（2）　調査の概要

穂高古墳群Ｇ１号墳（上原古墳）第３次・第４次発掘調査

指定等	安曇野市史跡　穂高古墳群Ｇ１号墳（上原古墳）
所在地	長野県安曇野市穂高9783番地
調査面積	80㎡
調査原因	上原古墳の保存を目的とした公園整備
発掘作業	第３次発掘調査　平成14年（2002）３月～平成14年（2002）４月 第４次発掘調査　平成15年（2003）10月20日～平成16年（2004）１月21日
整理作業	平成16年（2004）４月１日～平成26年（2014）３月31日 穂高町郷土資料館で遺物整理作業。 平成26年（2014）４月１日～平成27年（2015）３月31日 安曇野市文化財資料センターで報告書作成作業。 平成26年（2014）８月１日～平成26年（2014）12月26日 金属製品保存処理業務委託。

（3）　調査の目的

今回の調査の主たる目的は、上原古墳保存整備のための墳丘実測図の作成、石室実測図の作成、墳丘の残存状況の確認である。調査の過程では、墳丘・前庭部等から遺物が出土した場合は出土位置を記録して取り上げた。調査方法としてトレンチ法を採用し、墳丘の一部を掘削して堆積状況の記録を作成した。

上原古墳では穂高町教育委員会が保存整備計画を策定し、石室は崩落防止のため調査後に砂で埋め戻して保存することとした。また、墳丘は露出展示としている。

（4）　調査の経過

上原古墳の発見

昭和５年（1930）に水田拡張工事が行われた際に、数個の大石が出土し古墳であることが判明したため、同年５月に猿田文紀氏が中心となり石室を中心とした発掘調査が実施された（猿田1931、1933）。これを第１次調査とする。その後、古墳の石室には簡易的な木製の屋根がかけられ保存されていたが、徐々に朽ち果て、土砂の自然堆積もあり埋没していた。周辺が水田化するなか、古墳のみが水田の中にぽつんと残る形で保存されることとなった。

上原古墳と「担い手育成基盤整備事業　穂高西部地区」

平成８年（1996）から始まった「担い手育成基盤整備事業　穂高西部地区」（農地整備事業）にて、上原古墳を含む周辺の耕作地がその対象となった。そのため、穂高町教育委員会では地元及び松本地方事務所と上原古墳の保存方法について協議を行った。

その結果、上原古墳について墳丘も含めた範囲確認調査を行い、農地整備の余剰地を現在の上原古墳のある場所へ集約して古墳を保存することとなった。また、上原古墳が群集墳のひとつであるのか単独墳であるかを調べるため、試掘調査を実施し上原古墳周辺に埋没している古墳がないかを確認した。調査は、平成11年（1999）１月７日～２月25日に実施されたが、上原古墳以外の古墳は発見されなかった（穂高町教委2001a）。この調査を第２次調査とする。

上原古墳整備事業

「担い手育成基盤整備事業　穂高西部地区」が全て終了し、上原古墳を含む周辺が穂高町に移管され、併せて地元から上原古墳及び周辺整備の要望があがった。

平成14年（2002）３～４月、それまで正式な測量図がなく、また昭和５年（1930）に行われた発掘調査後、石室が土砂等で埋まってしまい石室の残存状況が不明であったため、第３次調査として石室内の清掃作業及び石室測量を行なった。

この調査の結果を踏まえ保存整備計画が立てられた。概要は次表のとおりである。

第３表　上原古墳保存整備計画

石　室	(1)　崩落の危険が高いため、底部より土のうで埋めて保護措置を図り、その上に砂を敷き、上面から石室の大きさがわかるようなサイン等を設置する。 (2)　現段階で崩れている石及び崩れる危険性のある石は積み直しを行なう。 (3)　石室保護の立場から石室の様子を観察することができなくなるため、測量図・写真等を説明板へ掲載する。
墳　丘	(1)　埋没し残存している可能性があるため、墳丘の調査を実施し当時の形に復元する。併せて周溝があれば周溝も復元する。 (2)　現在の地表面と当時の地表面の高低差により溝が生じ、そこへ雨水がたまる可能性があるため、水抜きの浸透桝を設置する。
その他	(1)　周溝あるいは、墳丘の外側への擬木柵の設置。 (2)　説明板の設置。 (3)　駐車場整備、植栽等。

翌年の平成15年（2003）10月20日～平成16年（2004）１月21日には、この保存整備計画に基づき石室の復元・石室の保護及び墳丘の復元等が実施された。

また、上原古墳を含む穂高古墳群は穂高町史跡として保存されてきたが、平成17年10月１日の安曇野市制施行後には、安曇野市教育委員会で市内の指定文化財等の再指定を行い、上原古墳も平成20年10月29日付で穂高古墳群の構成要素のひとつとして安曇野市史跡となっている。

２　発掘調査・整理作業の経過

(1)　現場作業の体制と経過

調査主体　穂高町教育委員会

調査担当者　山下　泰永（生涯学習課　文化担当）

調査員　今村　克

調査指導　桐原　健、森　義直

作業参加者　飯沼　達次、草間　秀康、小林　仁序、重野　昭茂、重野　典茂、白澤　勇、
田口　美智子、竹内　崇、竹内　充、田中　基義、寺島　完次、寺嶋　文保、寺嶋　俊子、
蓮井　寅次、深澤　貞臣、深澤　恒則、矢口　健陽児、山地　肅

事務局　穂高町教育委員会　生涯学習課
中島　芳孝（生涯学習課長）、原野　和徳（文化担当係長）、竹内　邦彦（文化担当係長）、
山下　泰永、佐野　順子（以上、文化担当）

上原古墳整備のための発掘調査及び周辺の整備事業についての概要は以下のとおりである。

第４表　整備のための調査

調　査	期　間	内　容
第３次発掘調査 （石室内の清掃及び測量）	平成14年（2002）３月 ～ 平成14年（2002）４月	(1)　石室内の清掃作業、石室内の測量 (2)　現地説明会の開催 (3)　石室の側壁崩落防止対策として、石室の２分の１を土のうで埋め保護措置を図る。
第４次発掘調査 （保存整備のための発掘調査）	平成15年（2003）10月20日 ～ 平成16年（2004）１月21日	(1)　石室の復元 側壁で、崩れている石を積み直す。 (2)　石室の保護及び墳丘の復元 石室内は土のうで底部より埋戻し、上部は当時の墳丘の高さまで砂を盛る。また砂を盛った上部には、石室の大きさがわかるようにレンガを配す。墳丘は、洪水による土砂堆積や自然堆積により埋没しているため、トレンチにより土層観察を行いながら、古墳築造当時の地形に復元した。 (3)　発掘調査終了報告書の提出 平成16年１月21日付長野県教育委員会に提出。

調　査	期　間	内　容
周辺の整備事業	平成15年（2003）11月末 ～ 平成16年（2004）３月	(1)　古墳南側の駐車場整備 造成し砕石を敷く。 (2)　築造当時の地表面と、現在の地表面の高低差が北側で1.0m、南側で1.5m生じ、周溝状を呈しており、溝内に水が溜まる可能性があるため、浸透桝を設置。 (3)　古墳南側の駐車場に擬木による柵を設置。 (4)　上原古墳の説明板の設置。 (5)　墳丘等への芝植栽、現地表面と築造当時の地表面の高低差により生じた法面への植栽。

(2)　整理作業の体制と経過

調査主体　安曇野市教育委員会

調査担当者　山下　泰永（文化課　文化財保護係長）、土屋　和章（文化課　文化財保護係）

作業参加者　北林　節子（平成26年度）、松田　洋輔（平成26年度）、
矢口　健陽児（平成16～25年度）

事務局　安曇野市教育委員会　教育部　文化課
那須野　雅好（文化課長）、山下　泰永（文化財保護係長）、土屋　和章（文化財保護係）

出土遺物の整理作業及び報告書作成作業の概要は以下のとおりである。平成16年（2004）４月からは穂高郷土資料館にて、出土土器の洗浄・注記・復元等を行った。平成26年度には報告書作成業務を実施した。作業は安曇野市文化財資料センターで行い、金属製品の保存処理については業務委託とした。

第５表　遺物整理作業及び報告書作成

調　査	期　間	内　容
遺物整理作業	平成16年（2004）４月 ～ 平成26年（2014）３月	(1)　穂高郷土資料館で遺物整理作業を開始。 平成16年３月、穂高神社に保管されていた昭和５年（1930）の調査の際の出土土器を穂高町教育委員会で受納する。今回の調査で出土した遺物を併せ遺物整理を行う。
報告書作成作業	平成26年（2014）４月 ～ 平成27年（2015）３月	(1)　安曇野市文化財資料センターで報告書作成に向けた整理作業を開始。 (2)　金属製品保存処理業務委託を実施。

3　遺跡の位置と環境

(1)　地理的環境

上原古墳の所在する安曇野市穂高上原地籍は松本盆地の中ほどに位置する。松本盆地は構造性の盆地で、西は飛騨山脈、東は筑摩山地と接している。本古墳は梓川（犀川）水系の堆積物の上に西の飛騨山脈から東流する烏川によって形成された扇状地の扇央に位置し、標高585m前後である。穂高古墳群の多くは山麓の沢沿いに分布しており、上原古墳のように扇央に所在する古墳は珍しい。

現在の烏川扇状地は須砂渡付近を扇頂として穂高市街地方面へ広がっており、完新世のものである。烏川は山間部から扇頂部では渓流となっているが、扇央部で流水が地下浸透するため水量が激減する。河床の岩石は、粘板岩、硬砂岩、チャート、ホルンフェルスなど中・古生層から供給されたものが主体となっている。現扇状地面上を流れる河川は歴史的に流路が一定しておらず、今回の発掘調査では古墳時代後期の地表上に砂礫層が厚く堆積していることが判明した。

烏川扇状地では、人々が扇状地上を流れる自然流を巧みに利用して水利を確保していたことが、これまでの調査研究から明らかになっている（小穴1987、穂高町教委2001a）。これらの流路は開発沢と呼ばれており、起源は古代に遡るとされる。穂高地域の開発沢は上原古墳の南西約850m地点の塚原地区内で穂高沢水系と柏原沢に分岐しており、本古墳の南に現在は穂高沢水系の今井沢が流れている。

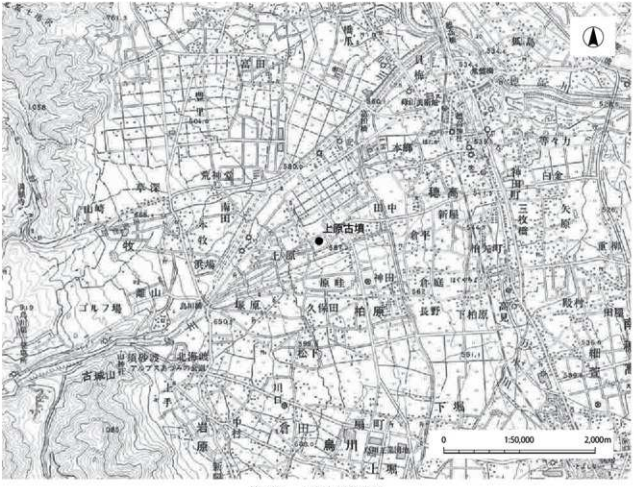
上原古墳発見時の記載によると周辺に埋没した未知の古墳が存在する可能性があるため「担い手育成基盤整備事業　穂高西部地区」の範囲内においては、第２次調査でトレンチ法による大規模な試掘を実施した。この結果、事業地内では周辺に古墳は確認されなかったため現在でも上原古墳は単独墳とされている。

(2)　歴史的環境

上原遺跡を包括する安曇野市穂高地域では、西側の北アルプス山麓で縄文時代の集落跡や古墳時代の群集墳の分布が目立つ。また、山麓から東に向かって流下する中小の河川の流末付近、すなわち扇状地の扇端部にあたる一帯は矢原遺跡群と呼ばれ『倭名類聚抄』（931～938）にある安曇郡八原郷、平安時代後期の矢原御厨と推測されている地域である。以下では、市内の概況も視野に入れ概観する。

縄文時代

安曇野市全体としての縄文時代の生活痕跡は、主に北アルプス山麓で確認されており、三郷小倉の東小倉遺跡、南松原遺跡、黒沢川右岸遺跡、堀金三田のそり表遺跡、神沢遺跡、穂高牧の離山遺跡、新林遺跡、他谷遺跡等で発掘調査が実施され縄文時代集落の存在が確認されている。時期的には早期から晩期までの遺物が出土しており、中期に遺跡数が増加する。また穂高地域から犀川を挟んで東岸の明科地域では、ほうろく屋敷遺跡、塩田若宮遺跡、こや城遺跡、上手屋敷遺跡、北村遺跡等で発掘調査が実施され、ほうろく屋敷遺跡では中期を中心とした集落、北村遺跡では後期に属する多数の土壙墓が確認された（明科町教委1991、長野県埋文センター 1993）。



第16図　上原古墳位置図

第17図　発掘調査位置図

弥生時代

穂高地域では矢原遺跡群とその周辺から過去の発掘調査及び採集遺物等で弥生時代後期の赤彩を施した土器片とそれに関連する遺構が確認されている。この他、穂高神社境内からは扁平片刃石斧が出土した記録がある（穂高町誌編纂委員会編1991）。

安曇野市全域では弥生時代の遺跡として、三郷小倉の黒沢川右岸遺跡、豊科田沢の町田遺跡、明科七貴のみどりヶ丘遺跡[1]等で発掘調査がなされ、中期の集落の存在が確認されている。またこの他に、明科南陸郷のほうろく屋敷遺跡、穂高牧の他谷遺跡、堀金三田のそり表遺跡からは発掘調査によって再葬墓が確認された（明科町教委1991、穂高町教委2001b、堀金村教委1988）。

古墳時代

穂高地域では古墳時代の集落として馬場街道遺跡、藤塚遺跡等で発掘調査がなされている。このうち、昭和62年（1987）に実施された藤塚遺跡の調査では、古墳時代後期の住居跡30棟と掘立柱建物５棟が見つかった（穂高町誌編纂委員会編1991）。

安曇野市全域としては、穂高古墳群のほか堀金烏川地域の山麓及び明科地域の東川手潮地区に中小規模の古墳群が築かれている。このうち、潮古墳群では平成17年（2005）に道路改良に際して発掘が実施され、７～８世紀に比定される円墳１基が調査された（明科町教委2005）。

奈良・平安時代

前述の通り八原郷及び矢原御厨に比定される矢原遺跡群は、奈良・平安時代の遺跡が隣接して分布しており、過去の発掘調査によって市内でもこの時期の様相が比較的明らかな地域のひとつである。ただし８～９世紀にかけては資料が少なく10世紀以降に住居数の増加傾向が見られる。馬場街道遺跡の調査成果からは、８世紀に比定される竪穴住居３棟、10～11世紀に比定される竪穴住居５棟、土壙１基等が確認された（穂高町教委1987）。

この時期、明科地域では７世紀後半創建と考えられる寺院跡が確認されており、明科廃寺と呼ばれている。これは長野県内でも最も古い寺院のひとつとして特筆される（明科町教委2000）。また、豊科田沢の山間部では須恵器窯跡群（上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群）が形成され、その製品は広く松本盆地一円に供給されている（豊科町東山遺跡調査会ほか1999）。

中世以降

穂高地域では中世以降の発掘調査事例は少なく、矢原遺跡群及びその周辺で遺構が点在的に確認されている程度である。馬場街道遺跡では中世の住居跡が１棟確認されている（穂高町教委1987）。

安曇野市全域としては、東西山麓に戦国期とされる山城、平地には中近世の館等が築かれた。穂高地域では、他谷遺跡の発掘調査によって当該期の地下式遺構が検出されている（穂高町教委2001b）。また、

(1)　調査報告では「緑ヶ丘遺跡」という表記となっている（太田・河西1966）。

豊科地域ではこの時期の城館及び集落等の発掘調査が行われ、その内部構造が明らかにされている（豊科町教委1992、1993、1994）。また、集落として上手木戸遺跡では中央自動車道長野線の建設に先立ち昭和61年（1986）に発掘調査が実施され、竪穴建物・掘立柱建物等が見つかっている（長野県埋文センター 1989）。

(3)　穂高古墳群の概要

穂高古墳群は安曇野市穂高・穂高有明・穂高牧・穂高柏原の北アルプス山麓の小河川沿い及び一部扇央に広がる古墳群で、現在のところ円墳のみで構成されると考えられる。明治時代以来、多くの研究者によって調査・研究が蓄積される中で現在はA～Hの８群に分類されて理解される。ここでは、穂高古墳群についての研究史の概略を記載する。

古墳群の把握と大別分類

穂高地域の古墳について最初に網羅的に詳述した記録として、大正12年（1923）発行の『南安曇郡誌』が挙げられる（南安曇郡編1923）。この中では、大正10年（1921）の県への報告をもとに有明村（現在の穂高有明）の古墳群及び西穂高村（現在の穂高牧及び穂高柏原）の古墳群が一覧表化されて掲載された。なお、発行の前年である大正11年（1922）には鳥居龍蔵氏が当地方に来訪しており、魏石鬼窟[2]や祖父塚[3]、狐塚等について所見を述べている。

第６表　『南安曇郡誌』(1923)

所在地	地名表に掲載された古墳	掲載数
有明村	１号、２号、３号、４号、５号、６号、７号、８号、９号、10号、11号、12号金掘塚[4]、13号金掘塚、14号連塚、15号祖父塚、16号、17号、18号、19号陵塚、20号、21号祝塚、22号、23号、24号、25号、26号、27号、28号、29号、30号、31号、32号、33号、34号、35号、36号、37号金掘塚、38号、39号、40号縣塚、41号犬養塚、42号、43号、44号、45号、46号、47号	47
西穂高村	１号、２号、３号、４号、５号、６号、７号、８号、９号二ツ塚、10号二ツ塚、11号、12号、13号狐塚、14号、15号、16号、17号三郎次塚、18号、19号、20号、21号鎧塚	21

穂高地域の古墳を最初に古墳群として捉え大別分類を行ったのは『信濃史料』第１巻である（信濃史料刊行会編1956）。第１巻上の古墳地名表では有明古墳群がA～Dの４群に分類されるが、穂高牧、穂高柏原の塚原、穂高の上原古墳は古墳群として分類されていない。『信濃史料』第１巻に先行して昭和５年（1930）には猿田文紀氏により上原古墳が発掘され、昭和８年（1933）には今井眞樹氏により検討が行われている（猿田1931・1933、今井1933）。今井氏の検討によって上原古墳等の石室が竪穴式であ

(2)　本書では「魏石鬼窟」、「魏磯域窟」等の表記は引用文献にあわせた。
(3)　本書では「祖父塚」、「ちいが塚」等の表記は引用文献にあわせた。
(4)　本書では「金掘塚」又は「金堀塚」の表記は引用文献にあわせた。

ると認識されたため、『信濃史料』第１巻下の要説では、「穂高町にある地下式の竪穴式石室は、信濃では珍しい内部構造といえる」と記載している。

第７表　『信濃史料』（1956）

所在地（大字）・群	地名表に掲載された古墳	掲載数
有明・A群	A１号墳、A３号墳、A６号墳、A７号墳	4
有明・B群	B１号墳、B３号墳、B４号墳、B５号墳、B６号墳、B７号墳、B８号墳、B９号墳、B10号墳、B11号墳、B12号墳、B13号墳、B14号墳、B23号墳、B26号墳、B29号墳、B30号墳、B31号墳、B32号墳	19
有明・C群	C１号墳、C２号墳、C３号墳	3
有明・D群	D１号墳（魏磯城窟）	1
穂高	上原古墳	1
牧	前田塚、寺島塚、神谷塚、鎧塚、西牧塚、シヨウシハウ殿古墳、三郎塚、狐塚第１号墳、狐塚第２号墳、狐塚第３号墳、狐塚第４号墳、狐塚第５号墳、浜場塚、上人塚	14
塚原	二ツ塚第１号墳、二ツ塚第２号墳、二ツ塚第３号墳、鎌塚	4

昭和43年（1968）発行の『南安曇郡誌』第２巻上では、藤沢宗平氏が南安曇郡内の古墳についての記載をしている（南安曇郡誌改訂編纂会編1968）。このうち穂高町の古墳については、有明古墳群、西穂高古墳群及びその他の古墳の３項目に分けて理解された。有明古墳群はA～Dの４群に分類され、A群は中房川右岸・油川沿岸に８基、B群は天満沢両岸に沿うもので32基、C群は富士尾沢に沿うもので４基、D群は中房川左岸に位置する魏石鬼窟１基の合計45基となっており、耳塚地区所在の耳塚は別扱いとなっている。また、西穂高古墳群は烏川を境に左岸（牧地区）のものをA群、右岸（塚原地区）のものをB群と分類しており、A群は14基、B群は10基の合計24基とされる。このほか、その他の古墳には上原古墳、耳塚、穂高神社境内の盛土が掲載されている。

第８表　『南安曇郡誌』（1968）

所在地（大字）・群	本文に記載された古墳	掲載数※
有明・A群 （中房川右岸・油川）	１号墳（陵塚）、２号墳、３号墳、４・５号墳、６号墳（犬養塚）、７号墳（県塚）、８号墳	8
有明・B群 （天満沢両岸）	１号墳（祖父塚）、２号墳、３号墳（連塚）、４号墳、５号墳（金堀塚）、６号墳、７号墳、８号墳、９号墳、10号墳、11号墳、12号墳、13号墳、14号墳、15号墳、16号墳、17号墳、18号墳、19号墳、20号墳、21号墳、22号墳、23号墳（祝塚）、24号墳、25号墳、26号墳、27号墳、28号墳、29号墳、30号墳、31号墳、32号墳	32
有明・C群（富士尾沢）	１号墳、２号墳、３号墳、４号墳	4

所在地（大字）・群	本文に記載された古墳	掲載数※
有明・Ｄ群（中房川左岸）	１号墳（魏石鬼窟）	1
西穂高・Ａ群（牧）	１号墳（前田塚）、２号墳（寺島塚）、３号墳（神谷塚）煙滅、 ４号墳（鎧塚）煙滅、５号墳（西牧塚）、６号墳（ショウシハウ殿古墳）、 ７号墳（三郎塚）、８号墳（狐塚１号墳）、９号墳（狐塚２号墳）、 10号墳（狐塚３号墳）、11号墳（狐塚４号墳）煙滅、 12号墳（狐塚５号墳）煙滅、13号墳（浜場塚）、14号墳（上人塚）	14
西穂高・Ｂ群（塚原）	１号墳、２号墳、３号墳、４号墳、５号墳、６号墳、７号墳、８号墳、 ９号墳、10号墳	10
その他の古墳	上原古墳、耳塚、穂高神社境内の盛土	3

※この表には引用文献の本文記載の古墳数を掲載した。

現状把握と再調査

昭和39年（1964）から昭和43年（1968）にかけて、古墳群の保護を目的とし穂高町教育委員会が現地踏査・実測図作成・標柱設置等を実施し、この成果は昭和45年（1970）に報告書として発行された（穂高町教委1970）。ここでは従来、有明古墳群と西穂高古墳群に大別されてきた穂高町の古墳分布の大枠を踏襲しつつ、さらに細別・再編成してＡ群４基、Ｂ群29基、Ｃ群５基、Ｄ群１基、Ｅ群14基、Ｆ群10基、Ｇ群１基、Ｈ群１基の８群65基にまとめている。

第９表　『穂高町の古墳』（1970）

群（地区）	掲載された古墳	掲載数
Ａ群（宮城）	Ａ１（陵塚）、Ａ３、Ａ６（犬養塚）、Ａ７（県塚）	4
Ｂ群（松尾、四ツ掘、小岩岳）	Ｂ１（ぢいが塚）、Ｂ２、Ｂ３（連塚）、Ｂ４、Ｂ５（金堀塚）、Ｂ６、 Ｂ７、Ｂ８、Ｂ９、B10、B11、B12、B13、B15、B16、B17、B19、 B20、B23（祝塚）、B24、B25、B27、B28、B29、B30、B31、B32、 B33、B34	29
Ｃ群（富士尾）	Ｃ１、Ｃ２、Ｃ３、Ｃ４、Ｃ５	5
Ｄ群（宮城）	Ｄ１（魏石鬼窟）	1
Ｅ群（牧）	Ｅ跡１（神谷塚）、Ｅ跡２（寺島塚）、Ｅ跡３（前田塚）、 Ｅ跡４（浜場塚１号）、Ｅ跡５（浜場塚２号）、Ｅ跡６（離山１号）、 Ｅ１（西牧塚）、Ｅ２（三郎塚）、Ｅ３（十三屋敷西古塚）、 Ｅ４（鎌塚）、Ｅ５（上人塚）、Ｅ６（狐塚１号）※、Ｅ７（狐塚２号）、 Ｅ８（狐塚３号）※	14
Ｆ群（塚原）	Ｆ１、Ｆ２、Ｆ３、Ｆ４、Ｆ５、Ｆ６、Ｆ７、Ｆ８、Ｆ９（二ツ塚）、 F10（二ツ塚）	10
Ｇ群（上原）	Ｇ１	1
Ｈ群（耳塚）	Ｈ１（耳塚）	1

※現在は、Ｅ６（狐塚３号墳）、Ｅ８（狐塚１号）となっている。

昭和56年（1981）から刊行された『長野県史』考古資料編でも穂高町の古墳群は取り上げられており、昭和58年（1983）刊行の主要遺跡の解説においては河西清光氏・松尾昌彦氏によって穂高古墳群として北安曇郡松川村鼠穴（ねずみあな）・南安曇郡穂高町有明・西穂高（現在の穂高牧及び穂高柏原）所在の古墳を包括した古墳群が設定された（長野県編1983）。このうち、松川村所在の古墳を除く穂高町所在の古墳は次表のとおりで、Ａ～Ｇの７群に大別されている。

第10表　『長野県史』（1981）

群（地区）	掲載された古墳	掲載数
Ａ群（有明）	Ａ１号（陵塚）、Ａ３号、Ａ６号（犬養塚）、Ａ７号（県塚）、Ａ８号	5
Ｂ群（有明）	Ｂ１号（ぢいが塚）、Ｂ２号、Ｂ３号（連塚）、Ｂ４号、Ｂ５号、Ｂ６号、Ｂ７号、Ｂ８号、Ｂ９号、B10号、B11号、B12号、B13号、B15号、B16号、B17号、B19号、B20号、B23号（祝塚）、B24号、B25号、B26号、B27号、B28号、B29号、B30号、B31号、B32号、B33号、B34号	30
Ｃ群（有明）	Ｃ１号、Ｃ２号、Ｃ３号、Ｃ４号、Ｃ５号	5
Ｄ群（有明）	Ｄ１号（魏磯城窟）	1
Ｅ群（牧）	Ｅ１号（西牧塚）、Ｅ２号（三郎塚）、Ｅ３号（十三屋敷）、Ｅ４号（鎌塚）、Ｅ５号（上人塚）、Ｅ６号（狐塚３号）、Ｅ７号（狐塚２号）、Ｅ８号（狐塚４号）※、Ｅ９号（前田塚）、E10号（寺島塚）、E11号（神谷塚）、E14号（雛山１号）、E15号（雛山２号古墳）、E16号（鎧塚）、E17号（ショウシハウ）、E19号、浜場塚	17
Ｆ群（塚原）	Ｆ１号（一本杉）、Ｆ２号、Ｆ３号、Ｆ４号、Ｆ５号、Ｆ６号（元塚大明神）、Ｆ７号、Ｆ８号、Ｆ９号（諏訪社）、F10号（二つ塚）	10
Ｇ群（上原）	Ｇ１号	1
群なし（耳塚）	大塚古墳	1

※「Ｅ８号（狐塚１号）」の誤記か。

この『長野県史』編纂事業の一環として、穂高地域の古墳群を再調査し検討する目的で筑波大学の岩崎卓也氏・松尾昌彦氏・松村公仁氏らによって墳丘・石室の実測及び既出遺物の実測調査が行われた（岩崎他1983）。この報告には、Ａ１号墳（陵塚）、Ａ６号墳（犬養塚）、Ｂ１号墳（ぢいが塚）、B23号墳（祝塚）、Ｇ１号墳（上原古墳）の他、松川村祖父が塚古墳、宮内庁書陵部所蔵の有明古墳群出土品の調査成果が掲載された。この検討では、まず有明古墳群（Ａ～Ｃ群）が扇頂部のみに分布するのに対し、牧（Ｅ群）・塚原（Ｆ群）は扇頂から扇央部近くまで分布するとして立地の差異を認め、２大古墳群となることを想定している。また、石室の規模に着目して以下に引用したＡ～Ｃの３類型に分類し、開口方向やＡ～Ｃ群での古墳の在り方との関係について検討している。なお、以下の古墳の表記（例「有明Ｂ-１号墳」等）は引用文献のままである。

Ａ類　石室長が９ｍ前後、石室幅が２ｍ以上の大形石室を指し、石室高が２ｍ近くにまで達する事も大きな特徴である。有明Ｂ-１号墳例が代表的なものであり、北安曇郡松川村所在の祖父が塚

古墳例などもこの範疇に属する。

B類　石室長が９m前後、石室幅が１～２mの狭小な一群の石室を指す。石室高は１m前後が一般的である。類例として有明A-１号墳例・有明A-６号墳例が挙げられ、上原G-１号墳例もこの種の石室に該当する。

C類　石室長が５m前後、石室幅が１～２mの石室で、B類に比して石室長がやや短い小形の石室である。

A～Cの各群の分布と石室類型の検討では同類型の石室が互いに近接する傾向が認められ、同一類型の古墳が連続して造築されたことが想像された。出土遺物の編年的考察からは古墳群の造営は６世紀後半から７世紀前半と考えられており、石室形態に明確な差異が存在しない事は造営期間の短さに起因すると考えられている。

昭和63年（1988）に奈良県藤ノ木古墳から鳥形の飾りが出土したことで、明治20年代に有明古墳群からも鳥形の金銅製鳳凰形飾板が出土していたことが報道され穂高町の古墳群に対する世論の関心が高まった。このため、当時の穂高町及び穂高町教育委員会は町内所在の古墳について過去の調査をもとに図録を発行している（穂高町・穂高町教委1989）。ここでは『長野県史』で用いられた穂高古墳群という語はまだ使用されていないが、有明古墳群、牧古墳群、塚原古墳群、その他単独古墳を次表のようにA～Hの８群78基（うち消滅及び不明８基）に分類している。

第11表　『穂高町の古墳群とその人々』（1989）

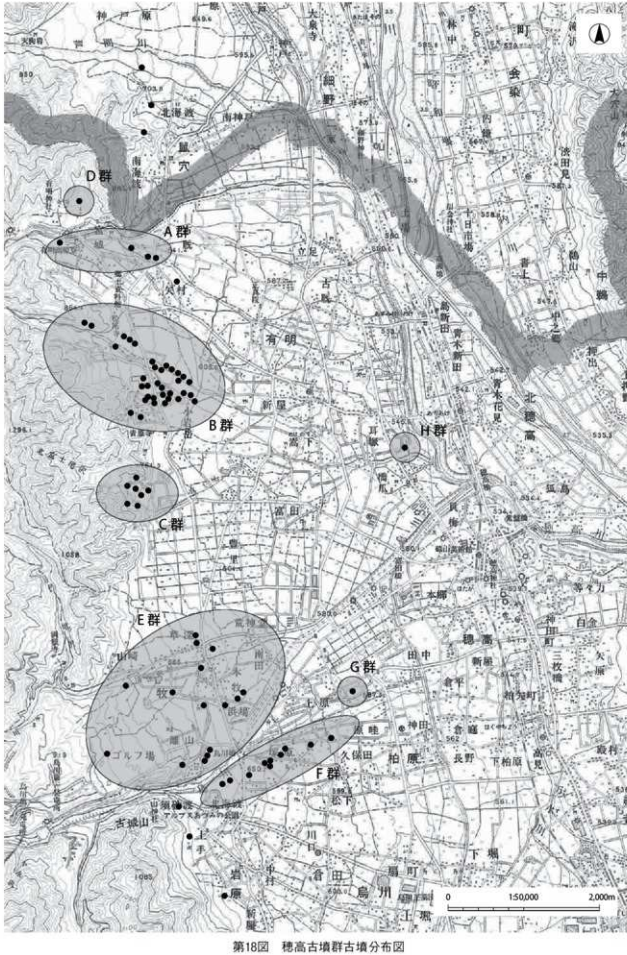
群	掲載された古墳	掲載数
有明古墳群・A群	A１（陵塚）、A３、A６（犬養塚）、A７（県塚）、A８消滅	5
有明古墳群・B群	B１（ぢいが塚）、B２、B３（連塚）、B４、B５（金堀塚）、B６、B７、B８、B９、B10、B11、B12、B13、B14、B15、B16、B17、B18消滅、B19、B20、B21消滅、B22消滅、B23（祝塚）、B24、B25、B26、B27、B28、B29、B30、B31、B32、B33、B34、B35、B36	36（消滅３）
有明古墳群・C群	C１、C２、C３、C４、C５	5
D群	D１（魏磯城窟）	1
牧古墳群・E群	E１（西牧塚）、E２（三郎塚）、E３、E４（鎌塚）、E５（上人塚）、E６（狐塚３号）、E７（狐塚２号）、E８（狐塚１号）、E９（前田塚）（E跡３）、E10（寺島塚）（E跡２）E11（神谷塚）（E跡１）、E12（浜場塚）（E跡４）、E13（浜場塚）（E跡５）、E14（雛山１号）（E跡６）、E15（雛山２号）不明、E16（鍔塚）不明、E17（ショウシハウ）不明、E18（雛山３号）不明、E19不明	19（不明５）
塚原古墳群・F群	F１、F２、F３、F４、F５、F６（元塚大明神）、F７、F８、F９（二つ塚）、F10（二つ塚）	10
G群	G１（上原古墳）	1
H群	H１（大塚様）	1

前記の図録に引き続き、平成３年（1991）には穂高町から『穂高町誌』が刊行された（穂高町誌編纂委員会編1991）。穂高町所在の古墳は群集墳と単独墳に大別され、前者にはＡ・Ｂ・Ｃ・Ｅ・Ｆ・Ｇ群、後者には耳塚大塚（Ｈ１）・穂高神社本殿背後の盛土・魏石鬼窟（Ｄ１）があてられた。なお、単独墳のうち穂高神社本殿背後の盛土については、「この盛土を古墳と観るについての事由は充分ではない」とされており、穂高古墳群の構成要素としては留保されている。

第12表　『穂高町誌』（1991）

群	掲載された古墳	掲載数
Ａ群	Ａ１（陵塚）、Ａ２ほぼ消滅、Ａ３半壊、Ａ４消滅、Ａ５消滅、Ａ６（犬養塚）、Ａ７（県塚）、Ａ８消滅	8
Ｂ群	Ｂ１（ぢいが塚）、Ｂ２、Ｂ３（連塚）、Ｂ４、Ｂ５（金堀塚）、Ｂ６、Ｂ７、Ｂ８、Ｂ９、Ｂ10、Ｂ11、Ｂ12、Ｂ13、Ｂ15、Ｂ16、Ｂ17、Ｂ19、Ｂ20、Ｂ23（祝塚）、Ｂ24、Ｂ25、Ｂ27、Ｂ28、Ｂ29、Ｂ30、Ｂ31、Ｂ32、Ｂ33、Ｂ34	29
Ｃ群	Ｃ１、Ｃ２、Ｃ３、Ｃ４、Ｃ５	5
Ｄ群	Ｄ１（魏石鬼窟）	1
Ｅ群	Ｅ１（西牧塚）、Ｅ２（三郎塚）、Ｅ３（十三屋敷西古墳）、Ｅ４（鎌塚）、Ｅ５（上人塚）、Ｅ６（狐塚３号古墳）、Ｅ７（狐塚２号古墳）、Ｅ８（狐塚１号古墳）、Ｅ９（前田塚）、Ｅ10（寺島塚）、Ｅ11（神谷塚）不明、Ｅ12（浜場塚１号古墳）、Ｅ13（浜場塚２号古墳）、Ｅ14（離山１号古墳）、Ｅ15（離山２号古墳）、Ｅ16（鎧塚）不明、Ｅ17（ショウシハウ殿）不明、Ｅ18（離山３号古墳）不明	18
Ｆ群	Ｆ１（一本杉古墳）、Ｆ２、Ｆ３、Ｆ４、Ｆ５、Ｆ６（中上古墳）、Ｆ７、Ｆ８、Ｆ９（二つ塚）、Ｆ10（二つ塚）	10
Ｇ群	Ｇ１（上原古墳）	1
Ｈ群	Ｈ１（大塚様）	1

近年は國學院大學考古学研究室によって穂高古墳群の調査が実施されている。平成21年（2009）には国営アルプスあづみの公園内に所在するＦ９・Ｆ10号墳の墳丘実測が行われ、翌年からはＦ９号墳の発掘調査が継続されており年度ごとに報告書が刊行されている。平成26年（2014）発行の報告書によると、穂高古墳群の理解を研究史にしたがって捉えており分布はＡ群１～８、Ｂ群１～37、Ｃ群１～７、Ｄ群１、Ｅ群１～19、Ｆ群１～10、Ｇ群１、Ｈ群１という８分類、現状で確認できないが文献上記載された例がある古墳も含め総数87基以上と考えられている（吉田他編2014）。なお、Ｆ９号墳の発掘調査は継続中であり詳細な成果については調査終了後の正式報告を待つことになるが、現在までに出土した須恵器からは６～７世紀及び８世紀の年代が得られている。また、この報告書には桐原健氏による論考も掲載されており、この中で穂高古墳群に加え犀川東岸の潮古墳群も分析対象として古墳時代から明科廃寺への変遷を考察している（桐原2014）。



第18図　穂高古墳群古墳分布図

(4)　上原古墳調査の研究史

現在のところ、穂高古墳群Ｇ群は上原古墳のみで構成されると考えられている。しかし、付近に「塚田」の小字名があることや、過去に大石が掘り出されたことなどから、今後新たに古墳が発見される可能性もある（猿田1931）。また、既出遺物として「上原」出土の直刀が穂高郷土資料館に保管されているが、この遺物が昭和５年以前に上原古墳から出土したものか上原区内の他所から出土したものかは確認できていない。

上原古墳では現在までに４次にわたる発掘調査が実施されており、概要は次表のとおりである。これまで上原古墳を取り上げた論考や報告については、平成13年（2001）の報告に要旨が掲載されている（穂高町教委2001a）。本書では、今回の報告に大きくかかわる研究について概観する。

第13表　上原古墳発掘調査記録

調査次	調査年	調査原因	調査内容	文　献
第１次	昭和５年（1930）	緊急発掘調査	石室を中心として発掘	猿田1931、1933
第２次	平成11年（1999）	農業基盤整備事業	上原古墳周辺に35箇所のトレンチを設定し、約500㎡を調査	穂高町教委2001a
第３次	平成14年（2002）	保存整備のための調査	石室の清掃及び石室実測図の作成	安曇野市教委2015（本書）
第４次	平成15（2003）～16年（2004）	保存整備のための調査	石室の復元及び保護、墳丘の復元	安曇野市教委2015（本書）

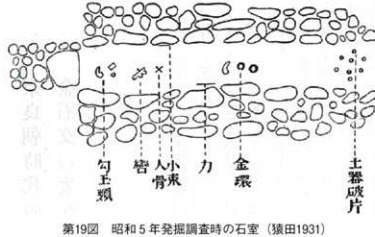
第１次発掘調査

上原古墳は昭和５年（1930）に上原地区の水田中から発見され、同年５月24～25日に猿田文紀氏によって調査された（猿田1931、1933）。発見の契機は、田地の所有者が耕地整理のため地均しをしたところ大石が出現し掘り進めた結果、さらに数個の石が石垣状に石積となっているのを確認したことによる。報告中には、これより東方約0.5kmの地に塚田という小字名があり、付近より約40年前（1890年頃か）に大石を掘り出して石塔３個を作ったことや、昨年（1929年か）大石２個を他所へ移転して埋めたことなどが記されている。

発掘の結果、墳丘はほとんど残存していないとされ、主として石室の調査が行われた。石室は左右及び奥の３面の石壁と天井石２個が現存していた。構造は「横穴式石廓」と理解され、羨道はなく、石室規模は正南に面して南北の長さ8.1m、幅の記載はない[5]。石室は烏川系統の花崗岩のみで築造されており、大きな石は奥壁基底に高さ0.88m、横1.2mのものが使用されているのみであった。また、石室の東壁は垂直であるが西壁は上部が約0.3m内側へ張り出しており、底面には小礫と砂利が２～３cmの厚さで敷かれていた。棺は確認されておらず、木棺が腐朽した可能性も示唆されている。猿田氏は次の理由を列挙し、上原古墳が以前に（遺物や石材採集目的の）発掘がなされたと考えている。

(5)　長野新聞（昭和５年５月26日付け）には、「延長八メートル幅一メートル四分長さ二メートルの古墳と判明」と報告されている（信濃考古学会編1930）。

1　蓋石が散失し、入口近くの一箇も縦になりて落込んでゐた事。
2　北より一・三米の地點に、間切りをしたとは思はれない側壁使用大の石が、雑然と埋つてゐた事。
3　奥壁より三・七米[6]、入口までは殆んど全部側壁大の石を以て埋められて居た事。
4　玄室上部、現表面より約十糎米位にて、馬具の破片数點発掘せられた事。
5　土器の破片に殆んど完全に近きものなく、同一箇所から出たものも器の形に合せられない事。
6　発掘物の大部分は槨の底面、砂利層の辺にあつたが、土器の破片及び馬具類が垂直的位置も、水平的位置もかなり異なりたるもゝあつた事。



第19図　昭和５年発掘調査時の石室（猿田1931）

第14表　南安曇郡穂高町上原古墳発掘に就て（猿田1931）

発掘品	数　量	内　容
祝部土器	破片約百箇	完全なるもの一つもなし。 イ　灰色にて釉薬を附せざるもの。 ロ　緑色を帯び釉薬を附したるが如く見ゆるもの。 ハ　褐色を帯びたるもの数点。 ニ　糸尻を有するもの数点。
玉類	十二箇	イ　勾玉七箇[7]、内赤瑪瑙製三箇、水晶製一箇、翡翠製三箇。 ロ　管玉一箇。碧玉製。 ハ　切子玉二箇、水晶製。 ニ　小玉二箇、瑠璃色、玻璃？
金環	二箇	空管にて純金らし。
馬具	破片多数	其内完全に近きものは轡のみで、鉄に銅及び金張りを以て装飾し、精巧なるものである。破片は上下左右位置をちがへて発掘した。
刀		イ　直刀一、鐔なし、総長五〇糎、厚三三糎。 ロ　小刀子二、一本はやや完全に近いが他の一本は破片のものである。
人骨		極めて少数の人骨あり。

(6)　第21図（猿田1933）では4.78mとなっている。
(7)　この報告中で図示されている勾玉は８点である。

出土遺物としては、祝部土器（須恵器）破片約100個、玉類12個、空管の金環２個、馬具破片多数、刀があり、祝部土器（須恵器）には完形品がないと報告されている。これらの内訳は第14表のとおりである。また、これら遺物の他に発掘品として「極めて少数の人骨あり」との記載がある。

この猿田文紀氏による調査・報告をうけて、昭和７年（1932）には今井眞樹氏を調査委員として現地確認及び検討が行われ、昭和８年（1933）に『長野県史跡名勝天然記念物調査報告書』第14輯の中で報告された（今井1933、猿田1933）。この報文中には猿田氏の報告が引用されており、猿田氏は前述調査の翌年に実施した再調査にて渓道有無と石槨規模について修正している。すなわち、昭和５年（1930）調査時には渓道はなく石室規模は8.1mとしていた所見を、昭和６年（1931）４月の再調査の結果「長さ２m、幅0.9mの渓道ある事を発見して前記渓道なしとの項を訂正」し石槨の長さを10.1mとした。

この報告において今井氏は「存疑其一　上原古墳と竪穴式石廓」、「存疑其二　上原古墳と穂高神社神城」、「存疑其三　上原古墳副葬品と埋葬者の身分」の３点の疑問を呈して古墳を保存すべき所以を述べている。

存疑其一については、昭和の時点での水田面の標高と古墳石室の蓋石上面及び側壁上面の比高から、上原古墳が既に発掘されたとみるよりは開墾当初に蓋石の位置変更等により石室内に土砂が陥没したと考えている。さらに、烏川の氾濫による沃土の堆積が重なり洪積地に築造された横穴式石廓古墳が埋没したと推察されているものの、一方で上原古墳の西方に所在する西穂高村字塚原中上の既発掘古墳[8]の石室が竪穴式と考えられ、入口付近の側壁のみ高さが他と異なる特徴が上原古墳と類似することを根拠として、上原古墳も竪穴式と想像している。この記述以降『長野県史』の刊行までの間、上原古墳及び塚原中上の古墳に代表される「竪穴式石廓」を有する古墳が安曇地方の特色と捉えられることとなった。

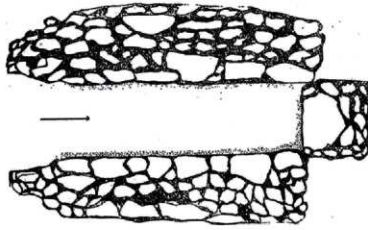
存疑其二においては、烏川流域の他の古墳が榊立内と呼ばれる穂高神社の神域を避けて分布しているのに対し上原古墳のみ域内に割拠している点について、次の５項目の観点を提示している。

1　穂高神社と烏川流域古墳群との関係在りや無しや。
2　烏川流域古墳群中上原古墳は他の古墳とは別系に属する古墳なりや否や。
3　古墳の凡てが洪積地に築造せられ穂高神社が沖積地に鎮座して偶然に古墳群の位置と穂高神社の榊立神域内と区別せられ上原古墳のみが築造年代の関係上その域内に入りしと見るべきか。
4　古墳築造当時既に穂高神社がこの地に鎮座してその神域を避けしと見る時はこの上原古墳のみ神域内に在るを以て如何に解釈すべきか。
5　穂高神社最初の鎮座が比較的後世に属せし為め上原古墳はその古墳たりしやを忘られてそこに神社が創建せられしか。

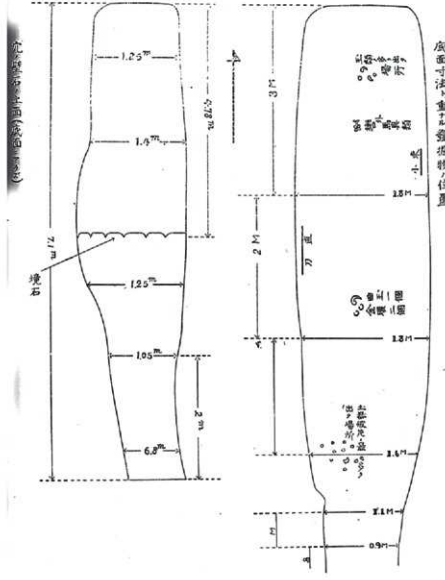
存疑其三では、上原古墳出土遺物のうち穴の周囲に三筋の刻みを有する硬玉質勾玉（いわゆる丁字頭をもつ勾玉）については高貴な人の佩用するものである点、鍍金した馬具（鏡板）は稀有の珍品である点が挙げられた。

---

(8)　現在の穂高古墳群Ｆ６号墳と考えられる。墳丘はなく、現水田面より下方に石室が築かれている。天井石はない。石室の規模は全長5.95m、幅1.50m、高さ1.15m。棗玉１点が出土している（穂高町誌編纂委員会編1991）。



第20図　昭和５年発掘調査時の石室（猿田1933）



第21図　昭和５年発掘調査時の遺物出土状況（猿田1933）

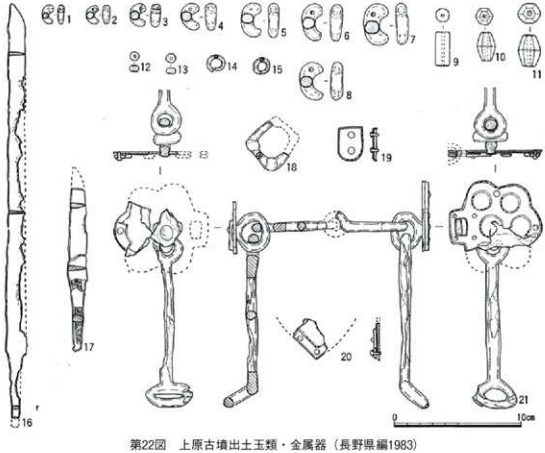
『信濃史料』から『長野県史』へ

昭和31年（1956）の『信濃史料』第１巻でも、上原古墳は長方形の竪穴式石室を有する円墳とされ、長さ9.0m（羨道2.0m）、幅1.8m、高さ1.0mで石室は地平線下にありと報告された（信濃史料刊行会1956）。また、この段階でも穂高町にある地下式の竪穴式石室は信濃では珍しい内部構造と捉えられている。

昭和43年（1968）には『南安曇郡誌』が改訂され、上原古墳についても記載された（南安曇郡誌改訂編纂1968）。竪穴式石室を有する円墳であること及び石室規模や出土遺物についての記載は『信濃史料』第１巻を踏襲している。また、玉類及び金環の実測図も掲載された。

昭和45年（1970）に穂高町教育委員会から発行された報告書では、昭和39年（1964）からの調査において上原古墳は有明古墳群及び西穂高古墳群と同列に群集墳の一部として認識されＧ群とされた（穂高町教委1970）。ただし、報告書が作成された調査目的が穂高町内所在の古墳群保存のための現状把握であるためか、記載内容は『信濃史料』第１巻を踏襲しており、石室は竪穴式石室とされている。

穂高町教育委員会による調査・報告をもとに昭和42年（1967）から『長野県史』編纂のため長野県教育委員会による分布調査も実施された（長野県編1981、1983）。『長野県史』では、穂高町教育委員会の見解を踏襲して「穂高古墳群」の名称を使用して古墳群をＡ～Ｇ群に大別したことは前述のとおりである。上原古墳については、松本市安塚古墳と比較し同じ構造であるとして横穴式石室と認識された。



第22図　上原古墳出土玉類・金属器（長野県編1983）

第15表　上原古墳出土玉類・金属器一覧（岩崎他1983から作成）

No.	名　称	大きさ	備　考
1	ヒスイ製勾玉	長1.51cm、幅0.86cm、厚0.50cm	丁字頭、片側穿孔
2	ヒスイ製勾玉	長1.42cm、幅0.94cm、厚0.57cm	両側穿孔
3	ヒスイ製勾玉	長1.80cm、幅1.22cm、厚0.76cm	丁字頭、両側穿孔
4	ヒスイ製勾玉	長2.12cm、幅1.42cm、厚0.89cm	片側穿孔
5	メノウ製勾玉	長2.69cm、幅1.62cm、厚0.82cm	片側穿孔
6	メノウ製勾玉	長2.88cm、幅1.56cm、厚0.90cm	片側穿孔
7	メノウ製勾玉	長3.30cm、幅1.83cm、厚0.95cm	片側穿孔
8	メノウ製勾玉	長2.95cm、幅1.76cm、厚0.88cm	片側穿孔
9	碧玉製管玉	径1.99cm、長2.70cm	片側穿孔
10	水晶製切子玉	径1.39cm、長2.28cm	片側穿孔
11	水晶製切子玉	径1.73cm、長2.50cm	片側穿孔
12	ガラス小玉	径0.71cm、長0.49cm	紫紺色
13	ガラス小玉	径0.67cm、長0.49cm	紫紺色
14	金環	長径1.41cm、短径1.26cm、厚0.28cm	金銅製中空式
15	金環	長径1.33cm、短径1.32cm、厚0.29cm	金銅製中空式
16	直刀	現存長64.8cm、身長54.6cm、厚0.6cm	茎に目釘孔あり、銹化著しい
17	刀子	現存長12.9cm、茎長5.7cm、身幅1.5cm、厚0.5cm	切先欠損、茎に木質痕、目釘孔等なし
18	鉄製辻金具	厚0.5cm	
19	飾金具	長2.7cm、幅2.0cm、厚0.3cm	鉄地銀張
20	心葉形杏葉片	現存長3.2cm、現存幅2.7cm、厚0.5cm	鉄地金銅張、縁金笠鋲留め
21	鏡板付轡	鏡板：長7.3cm、復元幅7.1cm、厚0.5cm 銜：長12.3cm、厚0.6cm 引手：長13.9cm、厚0.7cm	鏡板は鉄地金銅張、縁金笠鋲留め、鏡板裏面に環体を付属し、銜・引手はこれに連結する。引手端環は外反する。

石室の平面規模は猿田氏の報告を参考として全長10.1m、玄室長8.1m、羨道2.0mとされ、側壁は野面石を４～５段に積み、奥壁は一枚石を立てた上に２～３段積んでいるとされる。また、出土遺物についても再調査され、特に金属製品について新しく実測図が掲載され内容が詳述された（第22図）。これまで馬具として一括され、個別には鏡板付とされていた轡は九曜文鏡板をつけた轡一式とされ、この他に杏葉、辻金具、飾金具が出土したことが明らかになった。

この『長野県史』編纂の一環として、岩崎卓也氏・松尾昌彦氏・松村公仁氏により実施された古墳群の再調査の結果が昭和58年（1983）に発表され、上原古墳についても報告された（岩崎他1983）。石室については埋没しており実見できないため猿田氏の報告を参照して横穴式石室としつつ、規模は『信濃史料』第１巻と同様に長さ9.0m、幅1.8mとされた。遺物については、猿田氏による第１次発掘調査で出土し穂高神社所蔵となっていた玉類・金属器について実測図及び詳細が掲載された。実測図は『長野県史』にも掲載されたが、遺物の詳細については本論を参照し第15表を作成した。丁字頭の勾玉を含む

玉類の組成は古相を留める一方で、九曜文の鉄地金銅張鏡板付轡には新しい時期の特徴がみられるとされる。この他、中空の金環は６世紀後半以降に盛行するとされ、上原古墳の上限を６世紀後半と考えている。なお、石室構造の共通性からＡ１号墳（陵塚）も同時期と想定された。

昭和62年（1987）１月１日付けの信濃毎日新聞では古代信州についての特集中で、穂高神社所蔵の上原古墳出土直刀及び馬具のCMA（広領域高速度元素分析装置）解析を新日鉄に依頼し、元素分析を実施した。この結果、直刀にはチタン化合物が含有されており、直刀の原料となった鉄が砂鉄からつくられたこと、しかし馬具は砂鉄ではなく鉄鉱石からつくられていることが判明したと報告された。

第２次発掘調査

上原古墳第２次発掘調査は、平成11年（1999）に「担い手育成基盤整備事業　穂高西部地区」に先立つトレンチ法を用いた試掘調査として実施された（穂高町教委2001a）。昭和５年（1930）の猿田氏による第１次発掘調査以降は発掘が実施されなかったため遺物の検討が中心となって調査研究がすすめられてきたが、この調査によって墳丘について初めて調査が行われ検討されることとなった。

調査結果としては、前述のとおり周辺に埋没した未知の古墳は確認されなかったことの他、石室は当時の地表を約１m掘り下げて構築されたと考えられること、上原古墳墳丘にかかるトレンチの堆積状況の分析から墳丘は西高東低の自然地形の制約をうけて非対称系であった可能性があること、周溝をもつ可能性があることなどが今後の検討課題として提示された。また西側トレンチでは集石が認められ、ここから須恵器蓋と坏が出土した。これまで墳丘はほとんど残存していないと考えられてきたため、第２次調査によって墳丘が確認された意義は大きい。

本書掲載の第３次・第４次発掘調査では、第２次調査で提示された課題を念頭に墳丘・石室の実測図作成を実施している。

４　調査の概要

⑴　調査の方法

第３次・第４次発掘調査区は上原古墳の墳丘周辺とした。調査面積は約80㎡である。調査方法にはトレンチ法を採用し、墳丘にＴ１～５の５箇所のトレンチを設定した。Ｔ１は石室の主軸に対して直行し、Ｔ２は石室の主軸上で南側の前庭部付近、Ｔ３は主軸上で北側となる。さらに、石室北西にＴ４、前庭部西にＴ２と平行する形でＴ５を設定した。この他、墳丘・墳端の清掃をして葺石等の確認を行った。

第３次調査では、石室の清掃を行い実測図を作成した。清掃作業は石室内堆積土除去を手作業ですすめ、昭和５年以降に埋没した際の堆積土にはフルイは使用していない。床面付近の覆土は乾燥フルイで遺物等の検出に努めたが、遺物等は確認されなかった。なお、掘削土壌の主体は昭和５年以降に埋没した際の堆積土であったため、石室内の土層断面図は作成していない。石室清掃後には実測図作成を行った。実測後、危険防止のため土のう袋に周辺の土を詰めて全体の３分の２程度埋戻しを行い、第３次調査は終了した。

第４次調査では、まずＴ１を設定し掘削を開始した。トレンチの掘削は基本的にⅠ～Ⅴ’層を重機で掘り下げ、それより下層は手作業で精査した。ただし、Ｔ２・Ｔ３は全て手作業で掘り下げている。トレンチで墳丘の埋没・状況を確認した成果を基に、墳丘上に堆積した土壌を除去し墳丘の形を復元した。この際に、墳丘及び周辺から遺物が出土したため出土位置を記録して取り上げた。また、過去の水田造成等で墳丘から除去された葺石が調査区脇に集積されていたため、これを墳丘に葺きなおした。この後、平板測量で墳丘の平面実測、等高線測量を行った。この際に、羨道付近で崩落している石室構築材の石を原位置に復元した。実測図作成後は石室を全部埋戻し、石室の平面形がわかるようにサインとしてレンガを墳丘上の地表面に設置し第４次調査を終了した。

現場作業での写真は、一眼レフカメラを使用して35mmカラーフィルムで撮影した。室内整理作業においては、デジタル一眼レフカメラを使用して写真撮影を行った。また、金属製品のエックス線写真は保存処理業務委託の過程で撮影した。

遺構図面等の整理は、平成26年度に安曇野市文化財資料センターにて実施した。現場実測図面のトレースをコンピュータで行い報告書用図版を作成した。また、写真図版も同様にデジタル化して作成した。遺物のうち須恵器等の整理については、現場作業終了後から穂高郷土資料館で洗浄・注記・接合を行い、完形に近い須恵器は平成25年度まで展示資料とした。平成26年度には、これらの実測・トレース・写真撮影等を行い、本書を作成した。また、金属製品は保存処理未着手のまま穂高郷土資料館で保管されていたため、平成26年度に委託業務として保存処理を実施した。

なお、遺物の注記と出土位置の対照は第16表のとおりである。

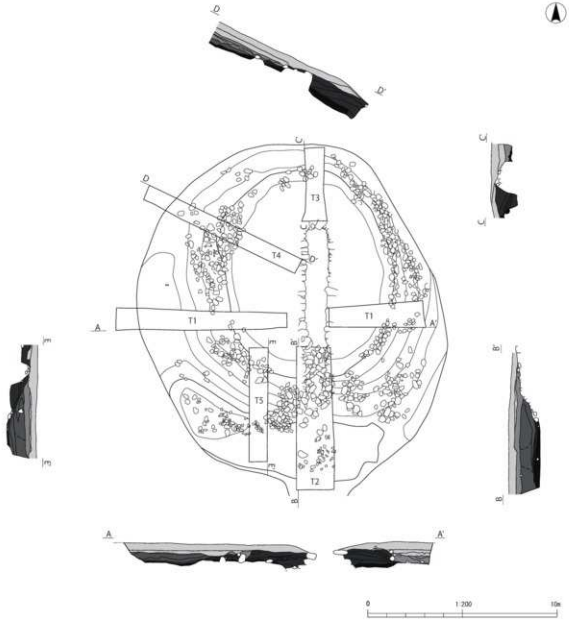
第16表　上原古墳注記対照表

注　記	出土位置
UK	上原古墳
UKE	上原古墳東側
UKEトレ下	上原古墳東側トレンチ下層
UKE下	上原古墳東側下層
UKE下トレ	上原古墳東側トレンチ下層
UKW	上原古墳西側
UKW３トレ下	Ｔ４下層
UKW-T	上原古墳西側トレンチ
UKW１トレ下	上原古墳西側Ｔ１下層
UKN-１トレンチ下	Ｔ３下層
UKZ	上原古墳前庭部
UKZ01	上原古墳前庭部
UKZE	上原古墳前庭部東側
UKEZ	上原古墳前庭部東側
UKZ-W	上原古墳前庭部西側
UKZW	上原古墳前庭部西側
UK　日付　石室入口	上原古墳石室入口
UK入口Wト	上原古墳入口西側トレンチ
試掘集中区UKWトレンチ	上原古墳試掘Wトレンチ集中区
シール添付	上原古墳　昭和５年出土遺物

(2)　層序

平成15年度の第４次発掘調査では、墳丘の埋没状況を確認するためＴ１～５の５箇所のトレンチを設定して土層観察を行った。このうち、Ｔ１は石室主軸に直行し石室の東西に設定した。この結果、土層はⅠ～Ⅲ層、Ⅳ～Ⅴ層、Ⅵ層、Ⅶ～ⅩⅠ層、ⅩⅡ～ⅩⅣ層の５つに大別された。上原古墳築造当時の周辺は、その当時の地表と考えられるⅩⅡ層が腐植質の黒紫色土で艶がないことから、針葉樹ではなく雑草か落葉広葉樹の葉などが堆積する環境下にあったことが推察される。また、ⅩⅡ層より下の土層が、砂利層、砂層であること、古墳南側の農地整備の際に地下数メートルにわたって砂利層が堆積している場所が確認されていること等から、築造時以前には古墳南側に河川があり、上原古墳の周辺はその氾濫原であったことがわかる。なお、この河川は烏川を水源とする自然流である柏原沢水系と考えられる。

立地については、上原古墳が埋没する原因となった押し出し性の洪水由来のⅥ層が、古墳の西側から南側には堆積しているが、古墳の北側及び東側のトレンチの土層セクションにはまったく見られないことから洪水は西方向から古墳にぶつかり、墳丘の西側から南側裾を巻くように流れ東に流下したことがわかる。また、古墳築造当時の面である黒紫色土ⅩⅡ層が、古墳北側では現在の地表面より約1.0m下から、南側では約1.5m下から確認され、古墳の北側と南側で50cm余りの高低差があることもわかる。以上の点から、古墳が築かれた当時の地形は、北側から南側に張り出した南傾斜の微高地、あるいは、西から東に流下する河川の左岸段丘を利用して構築されていることが判明した。なお、石室の入口はその下段に設けている。



耕作土（昭和５年以降か）	Ⅰ	部分的に礫を含む黒灰色土（現在の耕作土）
	Ⅱ	砂礫混入灰色土
	Ⅲ	鉄分・砂利混入暗灰色土
赤い耕作土（昭和５年以前の洪水等土砂流路由来の土）	Ⅳ	鉄分混入暗黄灰色シルト（部分的に砂質）
	Ⅴ	暗黄色シルト
	Ⅴ'	鉄分混入暗黄色シルト
押し出し性洪水によるもの	Ⅵ	暗黄色シルトブロック・混入砂利層
	Ⅵ'	暗灰色砂層
	Ⅵ''	暗灰色シルト
墳丘構築のための土	Ⅶ	礫・砂利混入暗黄褐色土
	Ⅶ'	砂利混入暗黄灰色シルト
	Ⅸ	砂礫・鉄分混入暗黄褐色シルト
	Ⅸ'	砂利混入暗黄褐色シルト
	Ⅸ''	黄褐色シルト
	Ⅹ	黒紫色土ブロック混入暗灰色砂層
	Ⅹ'	砂利・黒紫色土ブロック混入暗灰色砂層
	Ⅹ''	暗黄褐色シルトブロック・砂利・黒紫色土ブロック混入暗灰色砂層
	Ⅺ	砂利・礫・黒紫色ブロック混入黄色砂質土（当時の地表面からの掘込み）
古墳構築時の生活面及びその下層	Ⅻ	黒紫色土（当時の地表面）
	Ⅻ'	黒紫色土・黄色シルト混入砂利層
	XIII'	砂利層
	XIV	砂利混入黄色砂質土

第23図　上原古墳墳丘堆積状況図

5　遺構

⑴　墳丘

墳丘は部分的に削平されており、その時期は大きく分けて２回ある。１回目は近世の終わりから近代にかけて石塔用の大石が３個掘り出されたと伝えられている時期で、墳丘中腹を部分的に削っている。２回目は昭和５年（1930）の調査前後の農地整備をした時で、墳丘上部を削平している。この際にも天井石等大きな石が持ち去られたと伝えられている。しかし、前述のとおり古墳築造当時の面と考えられる黒紫色土（ⅩⅡ層）が古墳北側で現在の地表面より約1.0m下から、南側で約1.5m下から確認されたことから、上部と中腹の一部を除く墳丘の多くが埋没して残存していることが今回の調査でわかった。

墳丘を構築している土（Ⅶ～ⅩⅠ層）は、砂利・砂・シルト等を多く含み、全体的に盤築されている感を受けた。また、これらの土は他所からの搬入土のような特殊な土ではなく周辺の土砂（ⅩⅡ～ⅩⅣ層）を利用したものと思われる。また古墳裾からわずかに高い位置から、土留めと見られる人頭大からそれよりやや大きめの石が見られた。また、石室上部周辺や墳丘北西裾からは、数多くの人頭大からやや小さめの石が出土している。これらの石は、開田で削平された際に出土したものを集めたものと考えられ、その全体量から推察すると墳丘の表面全体に石を葺いていた可能性が高い。この葺石と考えられる石は石室に使用された石とは違い、直接烏川から運搬したものではなく当時古墳南側を流れていた河川より運び込まれたものと考えられる。石の種類は、花崗岩を主とし粘板岩、硬砂岩、チャート等である。今回の墳丘復元作業では古墳入口部両脇から（石室側壁からの並びの石は除いて）墳丘前面下半部にかけての葺石は確認されなかったため、今回の整備では石を葺かなかった。しかし、前述の洪水性出水の際に削られた可能性も考えられる。

墳丘の大きさは東西約13.8m、南北約14.5mを測る。石室の中心線より西が7.8m、東が6.0mで、西斜面より東斜面の方が、勾配が急で、石室の主軸は中心よりやや東に寄る。このことは、この辺りの地形が、西が高く東が低い傾斜の地形であることに起因するためと考えられる。なお、西側墳丘の北西部にはテラス状に張り出した集石が確認され、集石内から須恵器の坏、蓋が故意に割られて多数出土している。

周溝については、今回のトレンチ調査からは確認する事ができなかったため、存在する可能性は低い。

⑵　石室

上原古墳は、段丘状の地形を利用して築かれた古墳で、段丘下の南方向に開口した無袖の横穴式石室である。石室内に使用されている石の多くは上原古墳の北西約900mを流れる烏川の本流から形のよい花崗岩等を選び運び込まれていると考えられ、石材別の構成比は花崗岩８割、硬砂岩２割である。裏込めの石はわずかに見られる程度で、ほとんど当時の地表面下及び、周辺の砂利を使用し盤築してある。

石室の規模は、長さ9.2m、巾は奥壁付近で1.26m、中央で1.42m、玄室と羨道境で1.50m、壁高は1.40～1.75mを測り、主軸は真北を指す。

奥壁には高さ約90cm、幅約130cmの一枚の大石を腰石兼鏡石として配している。側壁には、石室を

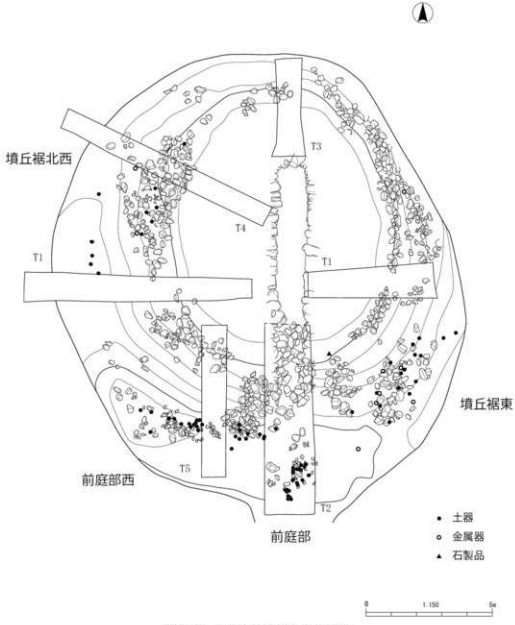
構築している石の中でも比較的大きな50～100cmの石を腰石として据えている。腰石より上については、市内の他の古墳の石室が腰石よりやや小ぶりの石を拳大の小さな石を間にかませながら上へと積み上げているのに対し、上原古墳の場合は当初から小さめの石を積み上げ上部に再び大きな石を載せその上に天井石を載せていたものと考えられる。

なお、今回の史跡整備事業において玄室と羨道の境付近の側壁が崩れていた為、左右の壁とも積み直しをした。また、玄室と羨道の境石である立石は当初東側のみで確認され西側では確認できなかったが、積み直しの際に西側でも横倒しとなった立石が確認でき原位置と思われる場所に据え直した。側壁の様子は西側が持ち送り以上にかなり内側に倒れ掛かる感じで、東側は垂直ないしは東側にやや傾く感を受けた。これは地震の影響の可能性がある。石室の石積みについては、南北で使用している石の大きさが異なり、西・東壁で石積みの方法が異なる。

(3)　墳丘の埋没過程

トレンチ調査で確認された堆積状況から埋没の開始時期は奈良時代終わり頃と考えられ、この時点から現在に至るまでに最低でも８回の出水が確認できる。これらの出水による水流は、ある時は緩やかに、またある時は人頭大の大石を流す急流として流量を変えながら、古墳南側に土砂等を堆積させている。そのため、古墳築造後わずかの期間で、南側河川の河床が古墳の石室床面より高くなり、河床に堆積した砂・シルト・粘土層を水がえぐり石室内を水没させている。石室床面には側壁下部から繋がるモグラ穴のような水道（みずみち）が何本か確認され、床面のシルトがマーブル柄を呈している箇所等も観察された。このことは、側壁及び開口部の集石の隙間から水が浸入し石室が水没した証である。また、上原古墳が発見される以前、水田開発が行なわれた際に水田の水が地下の穴に吸い込まれるような現象が見られたという伝聞もこのことに起因しているものと思われる。

6　遺物



第24図　上原古墳遺物出土位置図

(1)　土器類

出土した須恵器は歪んだものがほとんどで、生活用品として使うには耐えない製品をいくつかの窯場から直接、供出させている感を受けた。このことは、胎土、焼き色、器の法量、整形・調整の特徴等がまったく同じ土器が２セットから多いもので４・５セットずつ確認できることからいえる。

今回の調査で出土した遺物のほとんどは、墓前祭祀にかかわる遺物と考えられるが、鉄地金銅張りとめ金具、石製品など、本来は石室内の副葬品と考えた方がよいものもある。昭和５年（1930）の猿田氏の発掘所見の中にも、遺物が玄室床面よりかなり上層で出土している点を指摘し、「以前に発掘されたと思われる疑問の点」として遺物や石材採取の目的で発掘されていた可能性を挙げている。

第３次・第４次発掘調査が終了し、墳丘裾東、墳丘裾北西、前庭部及び前庭部西側から土器の破片が数多く出土したことから、昭和５年（1930）の第１次調査の際に出土し穂高神社に所蔵されている須恵器類と接合させる必要が生じた。このため、穂高町教育委員会は穂高神社から上原古墳出土土器を受納し、今回の出土遺物とともに接合・復元作業を行なった。以下では、出土地点別に遺物の概要を記載する。

第17表　出土土器の重量

出土位置（注記）	破片資料（kg）	報告書掲載土器（kg）	合計（kg）
墳丘裾東	1.003	7.953	8.956
墳丘裾北西	0.06	2.558	2.618
前庭部	0.605	1.362	1.967
前庭部西	1.233	7.126	8.359
昭和５年発掘	1.556	1.268	2.824
前庭部東	0.317	0	0.317
石室入口	0.789	0	0.789
UK	0.0013	0	0.0013
総重量			25.8313

墳丘裾東

墳丘裾東出土遺物には須恵器は坏身・坏蓋等がみられ、割られた状態で出土した。鉄製品には、鉄鏃がある。６の横瓶は、長さ40cmを越える大型品でほぼ１個体分が細かく割られた状態で出土した。産地は不明である。４、５は平瓶で、４は緑色を帯びた自然釉がかかっており、胎土の肉眼観察から尾北産あるいは美濃須衛の可能性が考えられるものである。また５は、同じく胎土の特徴から尾北産の可能性が考えられるものである。３は短頸壺である。黒褐色の自然釉がかかり、歪みがあり、焼成時に隣の製品の器壁の一部が癒着している。産地は不明である。１は、口径の大きさから広口壺等の蓋と考えられる。２は有台坏で、底部端外側に踏ん張るように高台がつくもので底部は回転ヘラケズリの跡がみられ高台より下にとびでている。

墳丘裾北西

墳丘裾北西から出土した遺物は須恵器の坏身・坏蓋がほとんどを占める。これらは、割られた状態で多数出土した。７～11はかえりがわずかに残る坏蓋、12～16はかえりのない坏蓋で、いずれも歪みの激しい製品が目立つ。17～19は底径が口径の６～７割という比較的底径が大きい箱形を呈す無台の坏で、17、19の底部調整は回転ヘラケズリである。胎土等の特徴から、尾北産の可能性が考えられる。20は平安時代後半の灰釉陶器の碗である。

前庭部及び前庭部西

前庭部（正面入口及びその両脇）の須恵器（坏身・坏蓋・長頸壺・短頸壺・甕・瓶・平瓶・高坏・横瓶）は、すべて割られた状態で多数出土し完形の状態で出土したものはない。７世紀後半から８世紀初頭と考えられる。

24～26の有台坏は口径が16cmあまりで広く、器高が３cm前後と低く、体部が直線的に開き高台が外側に踏ん張るものである。27～29は前述のものより若干器高が高く体部がやや丸みをおびて立ち上がる。これらの有台坏とセットになる21～23の坏蓋は口径17cmあまりで扁平なつまみが付き細部まで丁寧な調整がされているが、焼成段階で器壁が外反し変形しているものもある。色調は茶～褐色系である。生産地は不明であるが、地元産の可能性もある。図示できた長頸壺は４個体で、このうち36、37は肩が張ったもの、38、39は比較的肩が張らずに丸みを帯びた胴部を呈している。また、39は肩部に波状文を持つ。36は首が曲がるほど歪みが激しく、37は焼成時に隣の製品の器壁の一部が底部に癒着している。生活用品としては使うには耐えない製品である。胎土の特徴から尾北産の可能性が考えられるが、歪みの激しい２点の製品については、本当に搬入品かどうか疑問が残る。なお、一部の破片が昭和５年（1930）の調査の際に玄室の羨道部よりから出土した破片と接合している。33は大型の甕の口縁部で、胎土の色は白～灰色を呈し、クリーム色から緑色を帯びた自然釉がかかっている。胎土の特徴から尾北産の可能性が考えられる。34は、大型の平瓶である。胎土の色は灰色を呈し、器壁に亀裂が入る等の若干の歪みがある。産地は不明である。30、31は高坏である。胎土の特徴から尾北産の可能性が考えられる。32は瓶の口縁部で、胎土の色は白色を呈し、クリーム色から茶色を帯びた自然釉がかかっている。生産地は尾北産の可能性が考えられる。35は広口壺の口縁部で、黒褐色の自然釉がかかっている。胎土の特徴から尾北産の可能性が考えられる。

その他

前述の３箇所の遺物集中地点以外からも須恵器類が出土した。また、昭和５年（1930）出土で穂高神社所蔵であった須恵器のうち出土地点が明確でないものも、ここで扱う。猿田氏の報告によると出土地点はほとんどが羨道付近で集中しており、「破片は多いが、完形品はひとつもなく、復元できるものも少ない。灰色を呈しているもの。緑色を帯びた釉（自然釉）のかかったもの。褐色を帯びたもの。糸切を有するものなどが出土した」との記載がある（猿田1931、1933）。

今回図示したものは、坏蓋（かえり無し）、坏（無台）、有台坏の計６点である。40、41の坏蓋は、細部まで丁寧な調整がされており宝珠形のつまみが付き、暗灰色を呈するものと茶～褐色味を若干帯びた色調を呈するものがある。色調、作りとも前庭部及び前庭部西から出土した坏蓋と似る。45は無台の坏で、底部に調整と思われる幾筋かの条線に「レ」字状のヘラ記号が付くが、残念ながら底部に欠損がみられ全容は不明である。

⑵　金属製品

昭和５年（1930）の調査では、直刀が玄室中央西壁際から１本、小束（刀子）が玄室中央やや奥より

東壁際から１本[9]、玄室中央から九曜文鏡板をつけた鉄地金銅張りの轡一式、その他鉄地銀張りの杏葉、辻金具、飾金具が玄室の奥から出土したと報告されている。これら金属製品は、現在穂高神社所蔵となっている。なお、玄室入口から出土した直刀については、昭和62年（1987）１月１日の信濃毎日新聞に新日鉄が開発したCMA（広領域高速度元素分析装置）解析による元素分析結果が掲載されている。この記事では、直刀にはチタン化合物が含有されていることから、砂鉄製鉄による直刀であることがわかったとされた。

馬具では第３次・第４次調査で、前庭部及び石室入口から、鉄地金張製のとめ金具が11点、鉄製のとめ金具５点（うち脚部のみ２点）出土している。形懇は丸みを帯びた笠に２本の足がつくものである。１、12、36は、杏葉の破片で主に石室入口東側周辺から出土している。36は鉄地金張製の心葉形杏葉（一部鉄地銀張製）の上部の破片である。２、38は、菱型を呈する鉄地銀張製の飾金具である。６、７は、前庭部から出土したもので、扁平な円形を呈し上部に四角い孔があいた鉄地金張製の飾金具である。８、10は前庭部から出土した鉄製の鈴具である。なお、馬具の分類については坂本美夫氏の文献を参考にした（坂本1985）。

また、鉄鏃の分類については水野敏典氏の論考を参考にした（水野2013）。各部の名称については、先端から関（まち）までを鏃身部、関から篦被（のかづき）までを頸部、篦被から下の部分を茎部とする。４は鏃身部平面形が三角形でごく浅い逆刺をもつ。断面形は平造である。頸部は台形状の平面形で関は角関であり、断面四角形である。茎部は8.5cmを測り、断面形は四角形となっている。

⑶　玉類・石製品・装身具

狼田文紀氏の報告では昭和５年（1930）の調査では勾玉は、ヒスイ製４点（うち２点は丁子頭の勾玉）、メノウ製４点の計８点が出土している。出土地点は、玄室入口付近から１点、丁子頭の勾玉を含むその他の勾玉７点は玄室奥である（狼田1931、1933）。管玉は、碧玉製が１点で、玄室奥から出土している。切子玉は、水晶製が２点で、出土地点は、ひとつは玄室入口付近から、あとのひとつは出土地点不明である。ガラス小玉は、紫紺色を呈するもの２点で、玄室奥からと、玄室入口付近から各ひとつずつとなっている。金環は、金銅製中空式のものが２点で、玄室入口付近から出土している。これら装身具は、現在、穂高神社所蔵となっている。

今回の第３次・第４次調査では、石室内及び前庭部からの玉類・装身具の出土はなかった。唯一確認された装身具として、渓道東側墳丘上から水晶製のかんざし形石製品が出土している。

(9)　刀子は計２本出土している。他１本は破片で出土場所の詳細は不明。

7　調査の総括

(1)　上原古墳の墳丘と石室

上原古墳第３次・第４次発掘調査の結果、この古墳は北側から南側に張り出した南傾斜の微高地、あるいは西から東に流下する河川の左岸段丘を利用して構築された古墳で、墳丘の規模は東西約13.8m、南北約14.5mであることがわかった。なお、明確な周溝は今回の調査では確認できなかった。

石室の入口は南側の一段低い場所に設け、真北方向に石室を築いている。石室の形態は無袖で、その規模は、長さが9.20m、幅は奥壁付近で1.26m、中央で1.42m、玄室と羨道境で1.50mであることがわかった。なお、無袖ではあるが奥壁から約６mの側壁には立石があり、玄室と羨道を区別する意識があることが窺えた。

明科地域を除く犀川左岸にある古墳の中で、墳丘長径が14m以上の古墳を列挙してみると、第18表のとおり18基となる。そのほとんどが８m前後の石室をもつ古墳になると思われる。しかし石室長９mを越えるものとなると４基のみであり、数が極端に減る。そのひとつが上原古墳である。

第18表　墳丘規模と石室の関係（吉田他編2014をもとに作成）

	古墳名（別称）	墳丘規模		石室規模	石室長	備　考
		長（m）	短（m）	長（m）	／墳丘長	
1	Ａ１号墳（陵塚）	16.00	14.00	8.70	0.54	
2	Ａ７号墳（県塚）	14.00	不明	8.30	0.59	
3	Ｂ１号墳（ぢいが塚）	36.00	30.00	9.20	0.26	石室長延びる可能性あり
4	Ｂ４号墳	15.20	不明	10.20	0.67	
5	Ｂ５号墳（金堀塚）	15.00	12.00	8.60	0.57	
6	B10号墳	18.00	14.80	9.00	0.50	
7	B24号墳	14.00	不明	不明	不明	
8	B29号墳	14.30	不明	8.15	0.57	
9	Ｃ１号墳	18.50	11.70	7.20	0.39	石室長延びる可能性あり
10	Ｃ４号墳	14.20	9.10	不明	不明	
11	Ｅ２号墳（三郎塚）	14.00	不明	不明	不明	
12	Ｅ５号墳	15.00	不明	不明	不明	
13	Ｅ６号墳（狐塚３号）	19.80	16.50	不明	不明	
14	Ｅ８号墳（狐塚２号）	15.00	不明	不明	不明	
15	Ｆ９号墳（二ツ塚）	17.00	不明	7.00	0.41	
16	Ｇ１号墳（上原古墳）	14.50	13.80	9.20	0.63	
17	Ｈ１号墳（耳塚）	15.50	不明	不明	不明	
18	祖父が塚古墳	16.00	不明	8.14	0.51	松川村

次に墳丘の大きさと石室の長さの関係をみてみたい。ここに挙げた古墳では石室長／墳丘長が0.5～0.6を占める場合が最も多いことがわかる。代表的な古墳としてはＡ１号墳（陵塚）、Ａ７号墳（県塚）、Ｂ５号墳（金堀塚）などがあげられる。0.5を下回る古墳としては、Ｂ１号墳（ぢいが塚）、Ｃ１号墳、Ｆ９号墳（二ツ塚）など比較的大きい古墳があげられる。またこれらの古墳は、三木弘氏も指摘するように、それぞれの群の中でも標高の高い場所に位置している（三木2011）。一方0.6以上を占めている古墳は２基あり、その一つが0.63という数値を示す上原古墳である。上原古墳の場合、墳丘裾が石室を構成する石列の外周から比較的近いところを巡り、墳丘を必要最小限に構築していることを意味している。このことは、古墳築造の省力化と言えないだろうか。これに対し、Ｂ１号墳（ぢいが塚）、Ｆ９号墳は、石室の規模よりかなり大きく墳丘を構築していることから、しっかりとした古墳である反面、労力も大変であったことと思われる。この違いが生じる原因が時代的なものなのか、古墳の立地からくるものなのかの検討は今後の課題としたい。

(2)　上原古墳の出土遺物

土器

安曇野市内の古墳のほとんどが盗掘を受けているため、遺物も散逸してしまっている。したがって現在は旧町村誌及び研究誌等の文献に掲載されている、資料館、国立博物館、地元の神社、個人が所蔵している一部の遺物写真や実測図から全体の様相を判断するしかない状況にある。

上原古墳出土の土器は故意に細かく割られた状態で出土していた。出土場所は、羨道と前庭部周辺に散在的で、墳丘裾北西のテラス状の集石内からも出土しており、玄室床面から一括出土しているような状況は見られなかった。市内の他の古墳発掘事例が少ないため、単純に比較することはできないが、これまで発掘された古墳の土器出土状況や、資料館や神社等に所蔵されている資料をみてもこれほど細かく割れている遺物はなく、異質な感じをうける。

出土した須恵器のほとんどが、生活用品としては使うには耐えないほど歪んでいる。胎土等の観察から尾北産、美濃須衛が主流で、在地産が若干混じっているのではないかと考えられる。ただし、これほど歪んでいるものを遠路はるばる運んできたことには不自然さを感じる。また、有台坏とその坏蓋のセットについては、胎土、焼き色、器の法量、整形・調整の特徴等が酷似するものが複数セット確認できる。

次に、昭和５年（1930）に行われた狼田文紀氏の調査の際に出土した土器と、今回の第３次・第４次調査で出土した須恵器の特徴と時期についてふれてみたい。出土場所は大きく分けて、羨道から前庭部及びその西側、墳丘裾北西の集石内、墳丘裾東の３箇所である。

羨道から前庭部及びその西側からは、かえりの消失した坏蓋と、底部にヘラケズリの痕が残り口径が広く器高が比較的低い有台坏のセットが多くみられる。その他として高坏、甕、甕、平瓶、広口壺、長頸壺などがある。有台坏と坏蓋のセットと、それ以外の須恵器の一部には、わずかな時間差が認められるものもあるが、同時期に廃棄されたと見ても差し支えない範囲と考える。

墳丘裾北西の集石内からは、かえりのある蓋とかえりが消失した蓋が混在して数多く出土している。

その他底部の比較的広い箱型の無台の坏が出土している。かえりのある坏蓋が出土しているのはこの場所だけである。かえりの消失した坏蓋もかえりが残る坏蓋に作りが似ており、他から出土している坏蓋にくらべ径がやや小さいことが特徴である。また、坏は無台で有台坏は出土していない。以上の点から、羨道から前庭部及びその西側の須恵器よりわずかに古い段階であるといえる。

墳丘裾東からは、広口壺の蓋、口径が広く器高が低くヘラケズリの痕が残り底部が高台よりとび出している有台坏、短頸壺、平瓶、横瓶が出土している。有台坏と横瓶など、同じ墳丘裾東から出土していても若干の時間幅がある可能性もある。

以上３箇所から出土した須恵器の特徴からその時期を考察する。土器が出土したのは、羨道から前庭部にかけてと墳丘裾からであり、いずれも墓前祭祀に関わる須恵器が主であると考えられる。一方、確実に玄室内からの副葬品として捉えることのできる須恵器は皆無である。よって、須恵器の時期から、上原古墳で最初に葬送が行われた時期を推察することは不可能である。そのことを始めに断わっておきたい。

出土している須恵器についていえば、墳丘裾北西の集石内から出土している坏蓋と無台の坏は７世紀中頃から後半にかけてと全体の中ではわずかに古く、羨道から前庭部及びその西側から出土している有台坏と坏蓋のセットをそれより若干新しい８世紀初めと考えたい。しかし、同時期に破棄されたとしても決して不自然ではない時間幅と考える。

次に、上原古墳出土須恵器と、穂高古墳群Ａ群・Ｂ群から出土した須恵器を数多く収蔵している有明山神社の須恵器と比較してみたい。新しい須恵器の時期はどちらも８世紀初めまで下るが、穂高古墳群Ａ群・Ｂ群では、古い時期は６世紀後半まで遡る須恵器も確認できる。よって上原古墳墳丘出土の須恵器は穂高古墳群全体の中では新しい時期に入り、比較的短い時間幅であることがわかる。

玉類及び装身具

玉類及び装身具は出土場所が玄室奥と玄室羨道寄りの２箇所に分かれる。玄室奥からは、古い様相を示すヒスイ製の丁子頭の勾玉等を含む玉類が、玄室内羨道寄りからは６世紀後半以降に盛行するとされる金銅製中空式の金環２点と玉類が出土している。よって、この２箇所は、明らかに時間差があって副葬されたものと位置付けてもよいと考える。

馬具及び金属製品

昭和５年（1930）の調査の際に、玄室奥のやや中央寄りから鉄地金銅張製の花形鏡板付轡（九曜文鏡板付轡）が出土している。花弁の数は六花、立聞は方形の立聞孔をもつ形態で左右の肩はやや下がる。その周辺からは、鉄地金銅張製の心葉形杏葉片（下部）も出土している。今回の第４次調査でも、前庭部周辺等から心葉形杏葉の上部と考えられる破片が出土している。立聞がないことから鈒具付心葉形杏葉の可能性があるが、接続部分ははっきりしない。また、この杏葉は保存処理の過程の調査で鉄地金張製（部分的に鉄地銀張製）との報告を受けている。

以上、花形鏡板付轡と鈒具付心葉形杏葉の様相から総合的に判断すると馬具及び金属製品の年代は７

世紀前半が妥当ではないかと考える。なお、直刀の出土場所は、金銅製中空式金環の出土場所に近い玄室内の羨道寄りである。

遺物の出土状況

第３次・第４次調査で出土した遺物のほとんどは、墳丘上から原位置を保持して出土したと判断され、墓前祭祀にかかわる遺物と考えられる。しかし、鉄地金張製とめ金具、水晶質のかんざし形石製品等は、本来石室内の副葬品であったと考えた方がよい。猿田文紀氏の発掘所見の中でも「以前に発掘されたと思われる疑問の点」として、次のとおり盗掘の可能性を挙げている（猿田1931、1933）。

1　天井石があまりに散失し、入口近くの１個も縦に落ち込んでいる事。

2　北より1.3m地点にかなり多く、側壁に使用した大きさの石が埋まり、しかも底まで敷いたものではない事。

3　奥壁より3.78m[10]地点より、入口までは、ほとんど全部側壁大の石をもって埋められている事。

4　玄室上部において、表面より約10cmに馬具の破片と思われる金属片数点を発掘している事。

5　土器の破片がほとんど完全に近いものはなく、同じ箇所から出土したものも器の形に復元できない事。

6　発掘された遺物のほとんどは、底面敷砂利周辺から出土しているが、土器片及び馬具類は、垂直的にも水平的にもかなり散乱して出土している事。

昭和５年（1930）に行われた猿田文紀氏の調査は石室内を中心としたもので、埋没していた墳丘部分、前庭部については未調査である。そのことを踏まえ、今回の調査において、前庭部及びその西側の土器片と昭和５年調査時の羨道付近から出土した土器片とが一部ではあるが接合した点、前庭部周辺からの馬具関係の遺物出土状況、墳丘裾東からの鉄鏃の出土状況、羨道東側墳丘上からの水晶製の石製品の出土は、猿田氏が言う盗掘を受けていたのではないかとする考えを補強する結果となった。

⑶　上原古墳の位置付け

北安曇郡松川村から安曇野市にかけて分布する古墳群は、主に沢筋に分布する古墳後期の群集墳とされ、いくつかの支群に分類されてきた。その中で、上原古墳は沢筋に分布する他の古墳とは異なる単独の古墳という位置づけとなっている。平成11年（1999）の県営担い手育成基盤整備事業穂高西部地区に伴う第２次発掘調査の際も、単独墳か群集墳かを調べるために上原古墳周辺に35本のトレンチを設定し、未発見の古墳が埋没していないか調査を実施したが、新たな古墳を発見することはなかった（穂高町教委2001a）。一方で、上原古墳の東に「塚田」という小字があり大石数個が掘り出されたという話や、昭和20年代に今井沢右岸で農地整備が行なわれた際にも石積みが掘り出されたとの話が残っているのも事実である。次表は、上原古墳について築造されてから現在に至るまでの変遷である。

⑽　第21図（猿田1933）では4.78mとなっている。

第19表　上原古墳の変遷

1	上原古墳の築造	古墳時代後期。
2	上原古墳最初の埋葬	玄室奥から出土した馬具等の時期からは７世紀前半（玉類は伝世か）。
3	上原古墳追葬	玄室羨道寄りから出土した金銅製中空式金環と玉類の時期（７世紀前半～中頃）。
4	上原古墳追葬？	墳丘裾北西の墓前祭祀が追葬に伴うものか不明（７世紀後半）。
5	上原古墳追葬？	前庭部周辺の墓前祭祀が追葬に伴うものか不明（８世紀初め）。
6	洪水	洪水により一部埋没か。
7	再利用	古墳墳丘北西集石から平安時代灰釉碗の出土。先祖の墓という意識の表れか。
8	洪水による埋没	
9	洪水によりすべて埋没	
10	上原古墳周辺の開発	上原古墳周辺の開発は、文化13年（1816）に拾ヶ堰開削が行なわれた翌々年以降。用水に余裕がうまれ、今井沢の水を使用できるようになってからと言われている。
11	天井石の除去	石室天井石の除去、近世の終わりから近代にかけて石塔用の大石３個を掘り出す。石室へ土砂流入。
12	土砂の流入	昭和５年（1930）調査前後の農地整備、大石数個出土。さらに石室へ土砂流入。
13	昭和５年調査	
14	平成14年石室の再調査	
15	平成15年墳丘調査	

※最初の盗掘の時期は、洪水により埋没する前後の可能性あり。

上原古墳の墳丘の埋没状況からしても、近くに現在とは違う比較的大きな自然流が恒常的に流れていた可能性は高い。第２次発掘調査の報告書（穂高町教委2001a）では、農地整備施工区内の開発沢の調査を実施している。その中には上原古墳の南には烏川から分岐する自然流である柏原沢と、その柏原沢から扇状地扇端の開発のために分流したとされる今井沢がある。第２次発掘調査の報告書では、今井沢の開発の時期は扇端にある集落遺跡の年代から古墳時代後期まで遡る可能性があるとしている。もしそれが事実であれば、今井沢に沿うように数基の古墳が築かれていた可能性も捨てきれない。純粋な自然流に沿う支群には古い古墳がみられる傾向があることから、人工的な用水の性格が強い今井沢に沿うＧ群が群集墳であったとすれば、他の支群より若干時代が下る支群となってもおかしくない。今後、上原古墳周辺で未発見の古墳が数基確認されれば、他の支群と同様に沢筋に分布する支群のひとつと理解される可能性がでてくる。今後の課題である。

付表１　土器類観察表

No.	種別	器種	出土位置	残存部位	口径(cm)	頸部径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	技法の特徴			備考
									外面	内面	底部	
1	頸恵器	蓋	墳丘裾東	体部	16.0	－	－	(6.3)	ロクロナデ＋回転ヘラ切り	ロクロナデ	－	
2	頸恵器	坏	墳丘裾東	口縁部～底部	18.6	－	15.2	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	歪みが大きい、１～３mm程度の砂粒少量混じる
3	頸恵器	短頸壺	墳丘裾東	口縁部～体部下半	(10.4)	9.5	不明	(13.2)	ロクロナデ＋沈線	ロクロナデ	不明	頸部、体部に２条の沈線、焼成やや不良、口縁～体上半に自然釉、体部に焼成時に付着した他の土器片あり
4	頸恵器	平瓶	墳丘裾東	口縁部～体部上半、体部下半	(6.2)	4.1	不明	不明	ロクロナデ＋沈線	ロクロナデ	不明	頸部に１条の沈線、接合はしないが同一の口縁と体部下半
5	頸恵器	平瓶	墳丘裾東	口縁部～体部下半	8.0	5.3	不明	(17.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	
6	頸恵器	横瓶	墳丘裾東	口縁部～底部	10.0	10.0	－	27.1	ロクロナデ＋タタキ	当具痕＋ナデ	－	
7	頸恵器	坏蓋	墳丘裾北西	体部	13.0	－	－	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	－	歪み大
8	頸恵器	坏蓋	墳丘裾北西	体部	(14.0)	－	－	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	－	歪みあり、接合不良
9	頸恵器	坏蓋	墳丘裾北西	体部	(10.9)	－	－	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	－	歪み大
10	頸恵器	坏蓋	墳丘裾北西	体部	(9.8)	－	－	1.6	ロクロナデ	ロクロナデ	－	
11	頸恵器	坏蓋	墳丘裾北西	体部	(10.7)	－	－	(1.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	－	
12	頸恵器	坏蓋	墳丘裾北西	体部	(14.5)	－	－	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	－	ツマミ返り部分薄い
13	頸恵器	坏蓋	墳丘裾北西	体部	13.0	－	－	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	－	自然釉、口縁部片側歪みあり
14	頸恵器	坏蓋	墳丘裾北西	体部	(12.4)	－	－	(1.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	－	歪み大、上部に焼成時の付着物あり
15	頸恵器	坏蓋	墳丘裾北西	体部	15.2	－	－	(1.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	－	歪みあり、ツマミ欠損
16	頸恵器	坏蓋	墳丘裾北西	体部	16.8	－	－	(2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	－	ツマミ欠損
17	頸恵器	坏	墳丘裾北西	口縁部～底部	13.7	－	8.4	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	－	歪み第、底部厚不均一
18	頸恵器	坏	墳丘裾北西	口縁部～底部	13.2	－	8.8	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	成形、焼成不良
19	頸恵器	坏	墳丘裾北西	口縁部～底部	14.2	－	10.0	3.8	ロクロナデ＋沈線	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	歪みあり、底部厚不均一
20	灰釉陶器	椀	墳丘裾北西	口縁部～底部	15.0	－	7.8	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
21	頸恵器	坏蓋	前庭部西	体部	17.2	－	－	2.4	ロクロナデ	ロクロナデ	－	歪みあり、ツマミ位置中心よりズレ
22	頸恵器	坏蓋	前庭部西	体部	17.1	－	－	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	－	
23	頸恵器	坏蓋	前庭部西	体部	17.2	－	－	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	－	歪みあり

No.	種別	器種	出土位置	残存部位	口径(cm)	頸部径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	技法の特徴			備考
									外面	内面	底部	
24	須恵器	坏	前庭部西	口縁部～底部	16.0	－	11.2	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
25	須恵器	坏	前庭部西	口縁部～底部	16.4	－	11.0	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
26	須恵器	坏	前庭部西	口縁部～底部	16.4	－	11.3	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	
27	須恵器	坏	前庭部西	口縁部～底部	14.0	－	10.8	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	歪みあり、内面ロクロ目に指あと凹みあり
28	須恵器	坏	前庭部西	口縁部～底部	15.0	－	10.4	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	
29	須恵器	坏	前庭部西	口縁部～底部	不明	－	11.2	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	
30	須恵器	高坏	前庭部西	体部上半～底部	不明	－	－	(1.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	－	
31	須恵器	高坏	前庭部西	口縁部～脚部	15.3	2.9	10.2	12.1	ロクロナデ	ロクロナデ	－	
32	須恵器	瓮	前庭部西	口縁部	10.2	不明	不明	(2.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	内面に粘土粒が付着、歪みが小さい
33	須恵器	甕	前庭部西	口縁部～体部上半	27.0	19.2	不明	(10.0)	ロクロナデ＋タタキ＋波状文	ロクロナデ	不明	自然釉で緑がかっている
34	須恵器	平瓶	前庭部西	体部上半～体部下半	不明	不明	12.8	(11.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
35	須恵器	広口壺	前庭部西	口縁部～頸部	17.0	9.2	不明	(8.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	
36	須恵器	長頸壺	前庭部西	口縁部～体部下半	9.4	4.4	不明	(21.9)	ロクロナデ＋タタキ＋沈線	ロクロナデ＋しぼり痕	不明	頸部に２条の沈線
37	須恵器	長頸壺	前庭部西	口縁部～底部	(10.7)	5.5	11.2	27.5	ロクロナデ＋沈線	ロクロナデ＋しぼり痕	回転ヘラ切り	底部に焼成時に付着した土器片あり、頸部に２条の沈線
38	須恵器	長頸壺	前庭部西	体部上半～体部下半	不明	不明	不明	(10.8)	ロクロナデ＋沈線	ロクロナデ	不明	
39	須恵器	長頸壺	前庭部	体部上半～体部下半	不明	不明	不明	(14.0)	ロクロナデ＋波状文＋沈線	ロクロナデ	不明	
40	須恵器	坏蓋	その他	体部	15.1	－	－	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	－	内面になでた（押さえた）ようなあとあり
41	須恵器	坏蓋	その他	体部	17.1	－	－	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	－	
42	須恵器	坏蓋	その他	体部	(15.1)	－	－	(2.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	－	
43	須恵器	坏蓋	その他	体部	17.8	－	－	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	－	
44	須恵器	坏	その他	口縁部～底部	12.2	－	4.0	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	底部に焼成時付着痕あり
45	須恵器	坏	その他	口縁部～底部	15.7	－	5.7	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	底部に「レ」の字
46	須恵器	坏	その他	口縁部～底部	16.4	－	12.2	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	１～４mm程度の砂粒が少量混じる、歪みあり

付表２　金属製品観察表

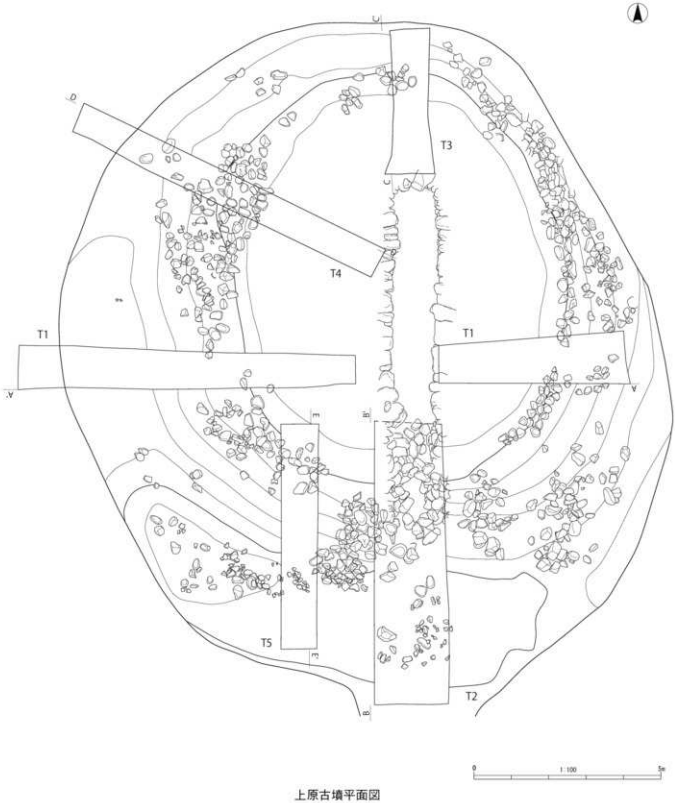
No.	名称	出土位置	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
1	不明	東地区No.3	鉄・銀	1.77	1.38	0.38	1.0	鉄地銀張り、杏葉の一部か
2	馬具	東地区No.12	鉄・銀	3.25	2.55	0.65	6.2	鉄地銀張り、飾金具か
3	馬具	東地区No.23	鉄	3.60	1.82	0.63	3.1	
4	鉄鏃	東側畳石内	鉄	14.37	3.64	1.19	31.3	
5	馬具	北西土器集中区内	鉄	4.31	2.70	0.76	10.4	
6	馬具	前庭部No.1	鉄・金	2.87	2.86	1.79	4.6	鉄地金張り
7	馬具	前庭部No.1	鉄・金	2.93	2.90	0.53	2.8	鉄地金張り
8	馬具（鈴具）	前庭部No.1	鉄	7.03	5.03	1.45	41.5	
9	とめ金具	前庭部No.2	鉄・金	1.53	1.31	1.94	1.5	鉄地金張り
10	馬具（鈴具）	前庭部No.2	鉄	13.38	5.00	1.32	51.5	
11	馬具	前庭部入口東側	鉄	4.67	2.87	0.51	4.8	
12	馬具	前庭部入口東側	鉄	3.60	1.94	0.39	2.8	杏葉の一部か
13	不明	前庭部西No.4	鉄	7.39	2.62	1.13	7.6	
14	とめ金具	石室入口	鉄・金	1.42	1.33	2.12	1.6	鉄地金張り
15	とめ金具	石室入口	鉄・金	1.45	1.41	1.79	1.7	鉄地金張り
16	とめ金具	石室入口	鉄・金	1.54	1.29	1.59	1.7	鉄地金張り
17	とめ金具	石室入口	鉄・金	1.50	1.43	1.95	1.7	鉄地金張り
18	とめ金具	石室入口	鉄・金	1.47	1.41	2.06	1.8	鉄地金張り
19	とめ金具	石室入口	鉄・金	1.45	1.36	2.03	1.7	鉄地金張り
20	とめ金具	石室入口	鉄・金	1.50	1.30	2.33	1.5	鉄地金張り
21	とめ金具	石室入口	鉄・金	1.45	1.32	1.26	0.9	鉄地金張り
22	とめ金具	石室入口	鉄	1.40	1.33	1.61	1.1	
23	とめ金具	石室入口	鉄・金	1.54	1.36	1.11	1.4	鉄地金張り
24	とめ金具	石室入口	鉄・金	1.45	1.27	2.42	1.5	鉄地金張り
25	とめ金具	石室入口	鉄	1.45	1.33	0.90	1.3	
26	とめ金具	石室入口	鉄	1.47	1.34	1.35	1.0	
27	とめ金具	石室入口	鉄	2.51	0.35	0.78	0.5	脚部のみ
28	とめ金具	石室入口	鉄	1.73	0.23	0.15	0.1	脚部のみ
29	不明	石室入口	鉄	1.91	0.39	0.98	1.2	
30	不明	石室入口	鉄	1.46	0.87	0.59	0.5	
31	不明	石室入口	鉄	1.10	0.66	0.30	0.2	
32	馬具	入口西トレンチ周溝内	鉄	4.15	3.47	0.53	10.0	
33	不明	入口西トレンチ周溝内	鉄	4.04	2.62	0.37	4.7	
34	不明	入口西トレンチ周溝内	鉄	2.28	1.60	0.25	0.9	
35	不明	入口西トレンチ周溝内	鉄	2.02	1.05	0.34	0.6	
36	馬具	不明	鉄・金・銀	6.56	3.09	0.69	9.3	鉄地金張り、鉄地銀張り、杏葉の一部か
37	不明	不明	鉄	5.69	1.00	0.75	4.2	釘か
38	馬具	不明	鉄・銀	3.07	2.81	0.74	3.2	鉄地銀張り、飾金具か

付表３　石製品観察表

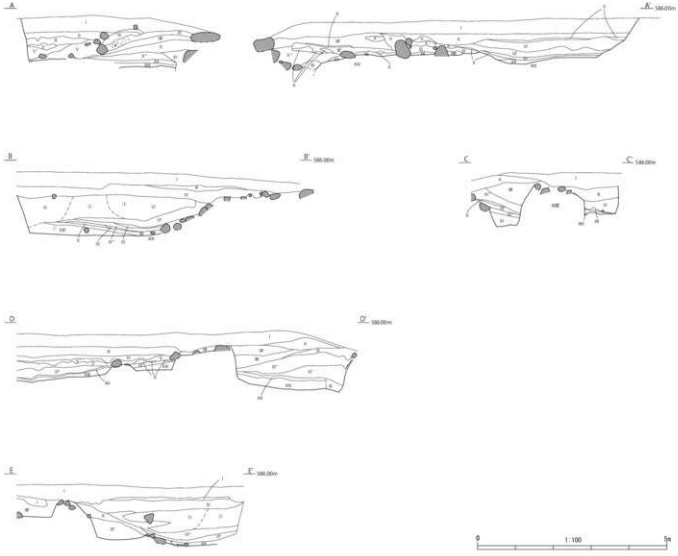
No.	名称	出土位置	最大長（cm）	最大幅（cm）	重さ（g）	備考
1	石製品	渡道東墳丘上	8.1	0.7	3.1	

上原古墳位置図

図 版 2



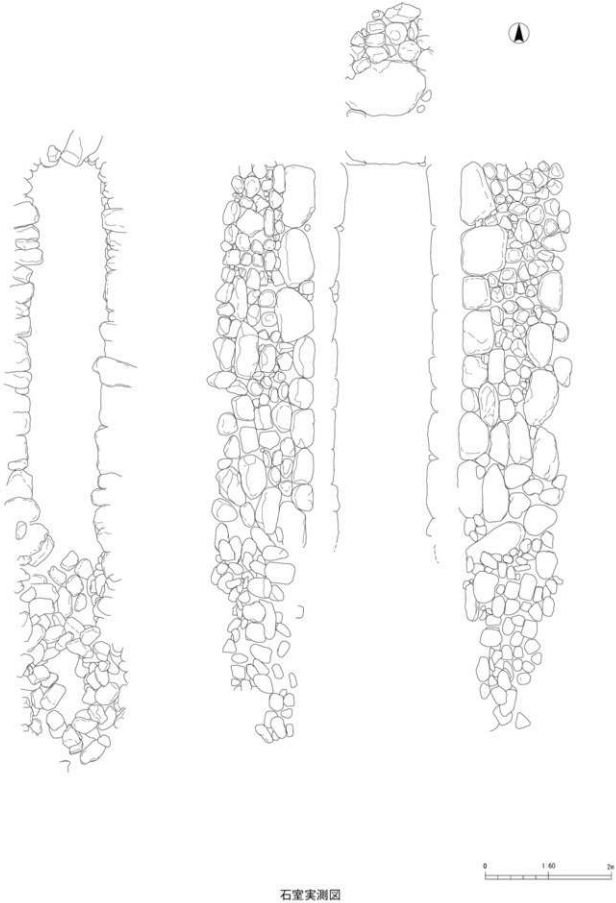
上原古墳平面図



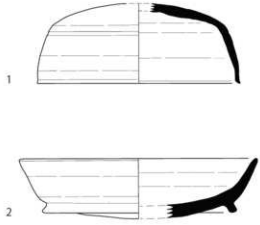
I　部分的に礫を含む黒灰色土（現在の耕作土）
II　砂礫混入灰色土
III　鉄分・砂利混入暗灰色土
IV　鉄分混入暗黄灰色シルト（部分的に砂質）
V　暗黄色シルト
V'　鉄分混入暗黄色シルト
VI　暗黄色シルトブロック・混入砂利層
VI'　暗灰色砂層
VI''　暗灰色シルト
VII　礫・砂利混入暗黄褐色土
VIII　砂利混入暗黄灰色シルト
IX　砂礫・鉄分混入暗黄褐色シルト
IX'　砂利混入暗黄褐色シルト
IX''　黄褐色シルト
X　黒紫色土ブロック混入暗灰色砂層
X'　砂利・黒紫色土ブロック混入暗灰色砂層
X''　暗黄褐色シルトブロック・砂利・黒紫色土ブロック混入暗灰色砂層
XI　砂利・礫・黒紫色ブロック混入黄色砂質土（当時の地表面からの掘込み）
XII　黒紫色土（当時の地表面）
XIII　黒紫色土・黄色シルト混入砂利層
XIII'　砂利層
XIV　砂利混入黄色砂質土

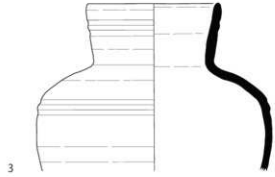
①～④は洪水による混入砂利層

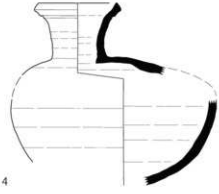
上原古墳トレンチセクション図

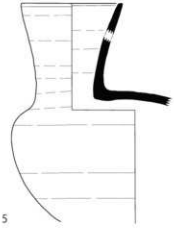


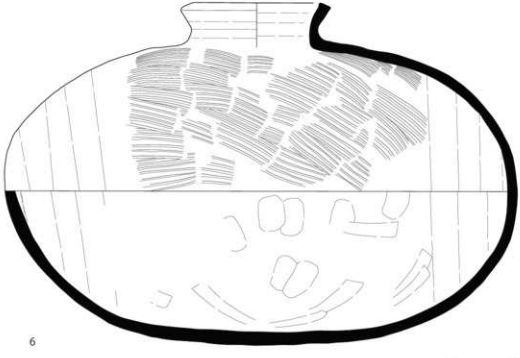
石室実測図

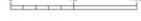








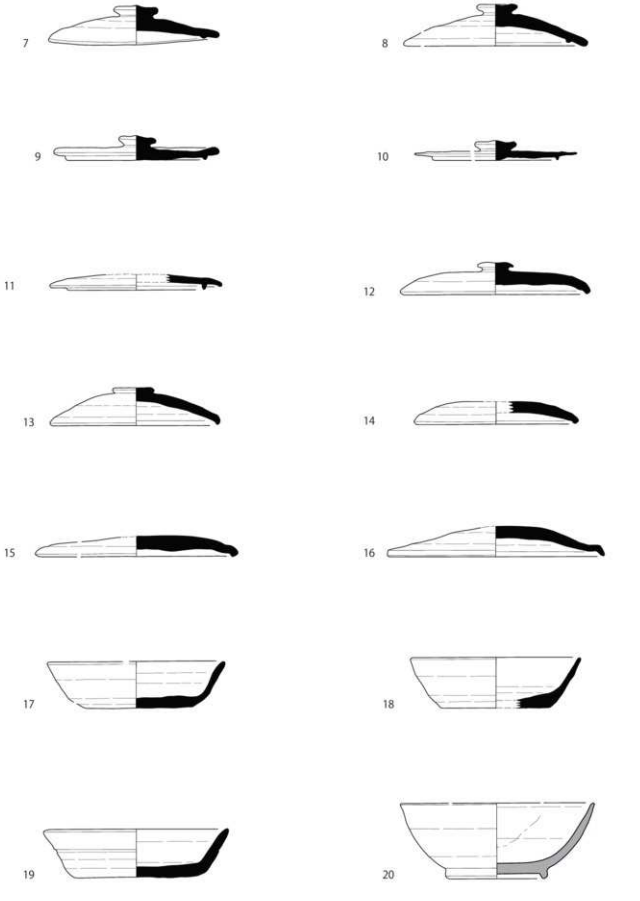




墳丘裾東出土土器

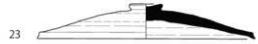
図 版 6

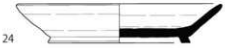
墳丘裾北西

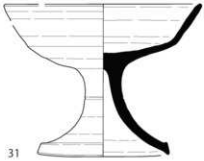


墳丘裾北西出土土器

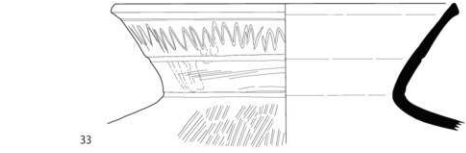
前庭部西

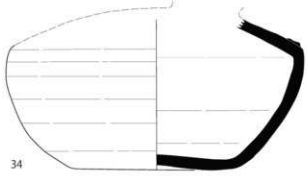


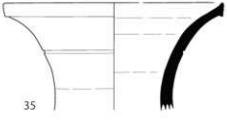


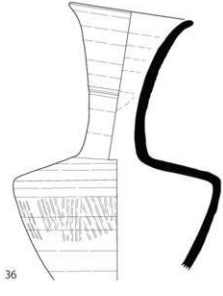


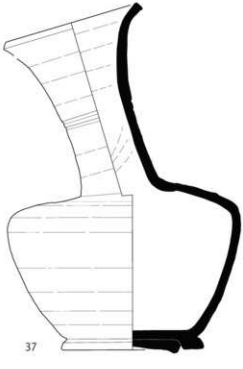
前庭部西出土土器 1

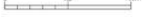








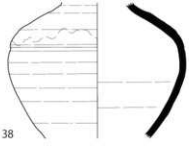


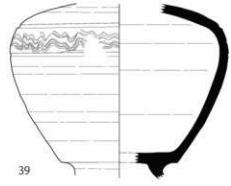


前庭部西出土土器 2

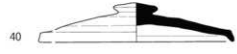
前庭部西

前庭部





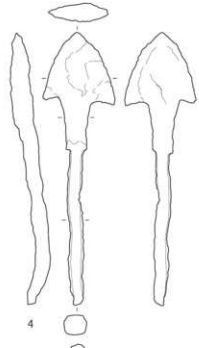
試掘区、昭和5年出土遺物

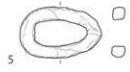


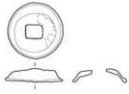
前庭部西出土土器 3 ほか

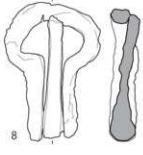
図版 10

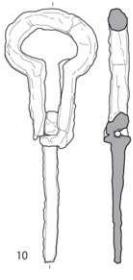
金属製品

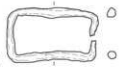


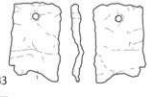




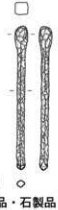




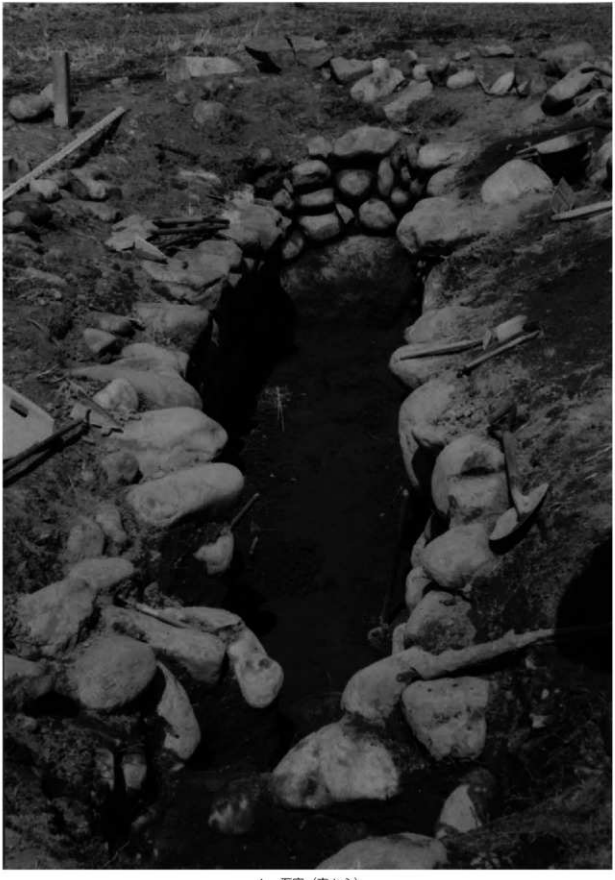




石製品



金属製品・石製品



1　石室（南から）

2　石室（南から）

3　石室（西から）

4　上原古墳の南50mの地層

5　T２調査状況（南から）

6　T２西壁堆積状況

7　T５東壁堆積状況

8　前庭部西遺物出土状況

9　前庭部西遺物出土状況

10　前庭部西遺物出土状況

11　前庭部西遺物出土状況

12　墳丘裾北西遺物出土状況

13　墳丘裾北西遺物出土状況

14　墳丘裾東遺物出土状況

15　前庭部西遺物出土状況

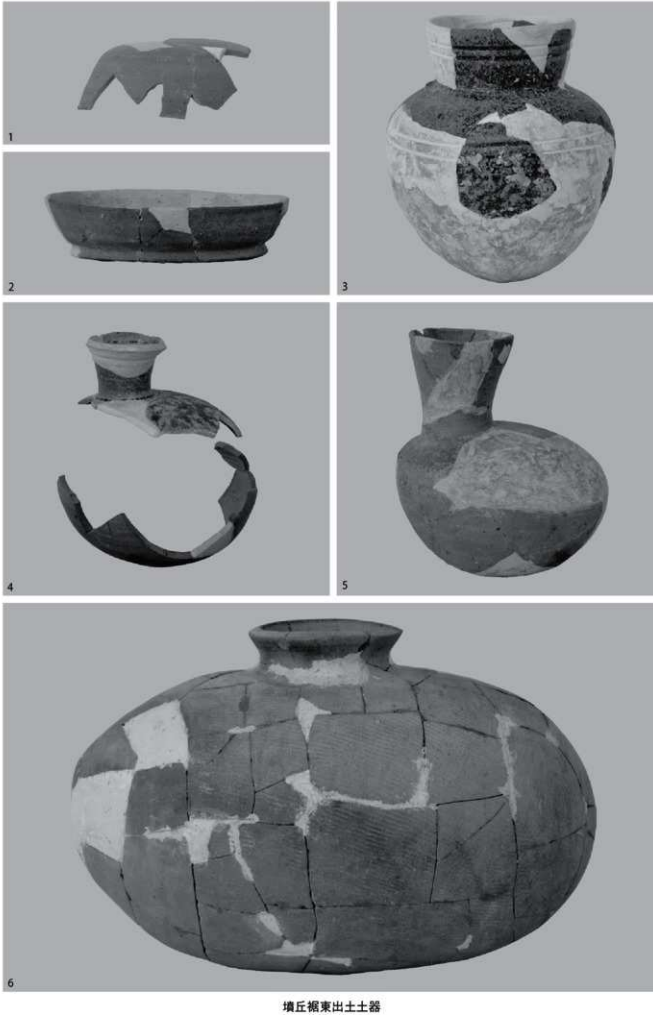
16　石室埋戻し状況

17　石室埋戻し状況

18　墳丘整備完了

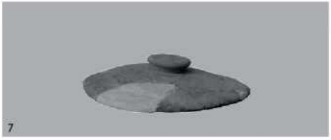
19　昭和 5 年調査出土遺物（穂高神社所蔵）

墳丘裾東



墳丘裾東出土土器

墳丘裾北西

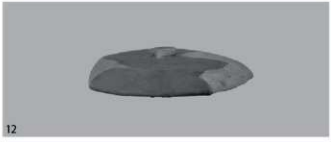

7

8

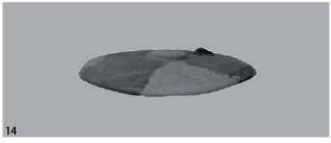
9

10

11


12

13


14

15

16

17

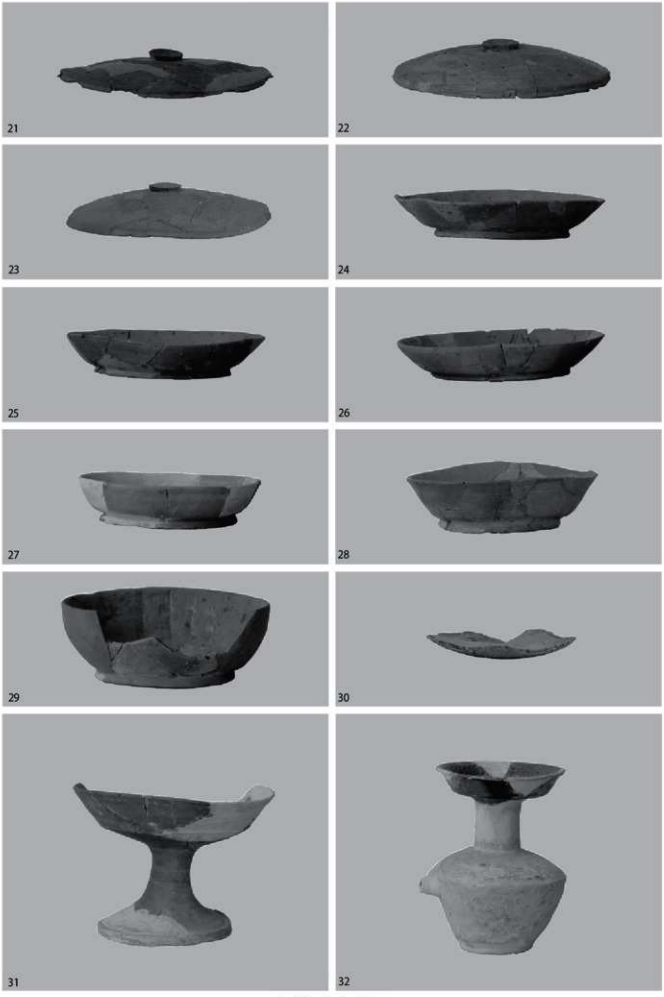
18

19

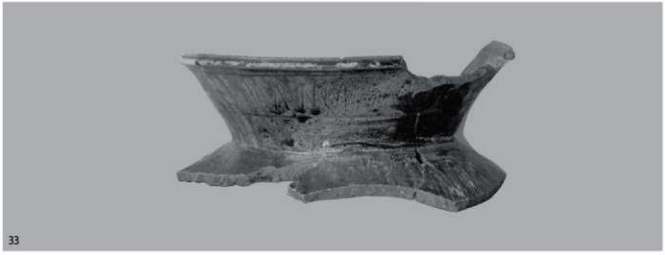
20

墳丘裾北西出土土器

前庭部西



前庭部西出土土器 1


33

34

35

36

37

前庭部西出土土器 2

前庭部西

38

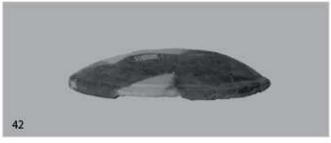
前庭部

39

試掘区、昭和 5 年出土遺物

40

41


42

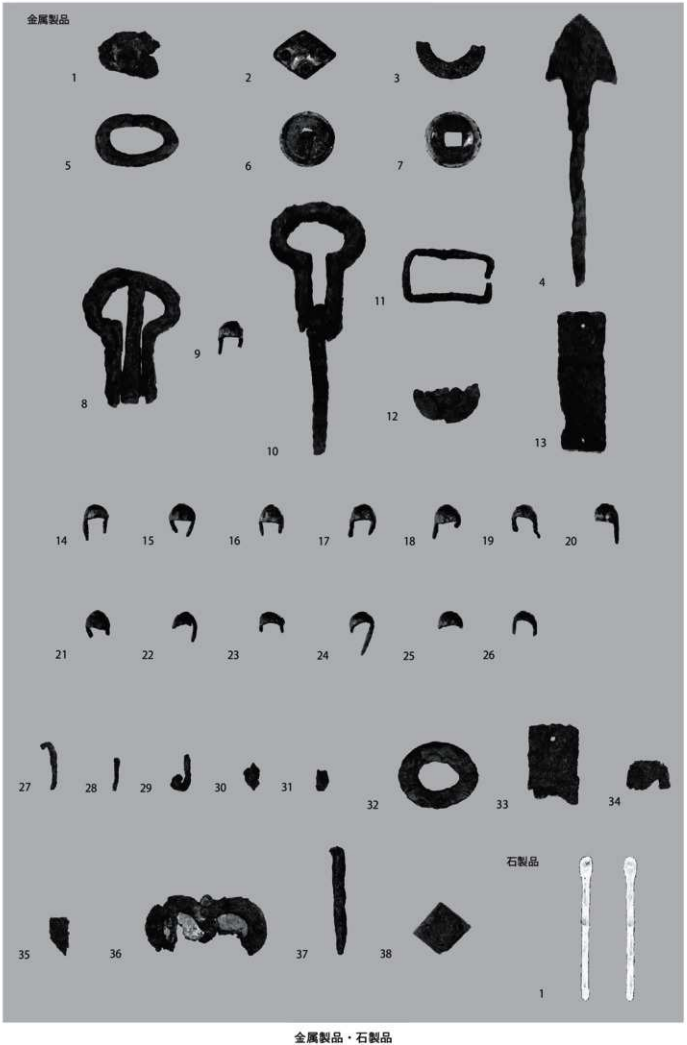
43

44

46

45

前庭部西出土土器 3 ほか


金属製品
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
石製品
1

金属製品・石製品

引用・参考文献（五十音順）

明科町教育委員会　1991　『ほうろく屋敷遺跡－川西地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』明科町の埋蔵文化財第３集　明科町教育委員会

明科町教育委員会　2001　『ほうろく屋敷遺跡Ⅳ－個人住宅新築工事に伴う第４次緊急発掘調査報告－』明科町の埋蔵文化財第11集　明科町教育委員会

明科町教育委員会　2005　『潮神明宮前遺跡Ⅱ－町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書－』明科町の埋蔵文化財第13集　明科町教育委員会

安曇野市教育委員会　2009　『三枚橋・藤塚遺跡－安曇野市穂高交流学習センター建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』安曇野市の埋蔵文化財第２集　安曇野市教育委員会

今井眞樹　1933　『穂高町上原の竪穴式石廓古墳』『長野県史跡名勝天然記念物調査報告』第14輯　長野県・長野県教育委員会　（所収　1974　『長野県史跡名勝天然記念物調査報告』第４巻　長野県文化財保護協会　pp.64-81）

岩崎卓也、松尾昌彦、松村公仁　1983　「有明古墳群の再調査」『信濃』第35巻11号　信濃史学会　pp.32-60

小穴喜一　1987　「土と水から歴史を探る－古代・中世の用水路を軸として－」　信毎書籍出版センター

太田喜幸、河西清光　1966　「長野県東筑摩郡明科町七貴緑ヶ丘遺跡調査」『松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告」　長野県考古学会　pp.139-156

桐原健　2014　「附編　安曇郡に観る古墳と寺院」『長野県安曇野市穂高古墳群2013年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第50集　國學院大學文学部考古学研究室　pp.(1)-(7)

坂本美夫　1985　「馬具」考古学ライブラリー 34　ニュー・サイエンス社

猿田文紀　1931　「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」『信濃考古学会誌』第２年第５・６輯　信濃考古学会　pp.168-171

猿田文紀　1933　「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」『長野県史跡名勝天然記念物調査報告』第14輯　長野県・長野県教育委員会　（所収　1974　『長野県史跡名勝天然記念物調査報告』第４巻　長野県文化財保護協会　pp.67-80）

信濃考古学会編　1930　「記録帖」『信濃考古学会誌』第２年第４輯　信濃考古学会　pp.126-129

信濃史料刊行会編　1956　『信濃史料』第１巻上・下　信濃史料刊行会

豊科町教育委員会　1992　『吉野町館跡遺跡－県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　豊科町教育委員会

豊科町教育委員会　1993　『梶海渡遺跡－県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』豊科町教育委員会

豊科町教育委員会　1994　『鳥羽館跡遺跡－県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　豊科町教育委員会

長野県編　1981　『長野県史　考古資料編』全１巻⑴遺跡地名表　長野県史刊行会

長野県編　1983　『長野県史　考古資料編』全１巻⑶主要遺跡（中信）　長野県史刊行会

長野県編　1988　『長野県史　考古資料編』全１巻⑷遺構・遺物　長野県史刊行会

長野県埋蔵文化財センター　1989　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書10　－松本市内　その７・豊科町内－　南中遺跡・北中遺跡・北方遺跡・上手木戸遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書10　長野県教育委員会

長野県埋蔵文化財センター　1993　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11　－明科町内－　北村遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書11　長野県教育委員会

穂高町誌編纂委員会編　1991　『穂高町誌』第２巻（歴史編上・民俗編）　穂高町誌刊行会

穂高町・穂高町教育委員会　1989　『穂高町の古墳群とその人々』　穂高町・穂高町教育委員会

穂高町教育委員会　1970　『穂高町の古墳－穂高町古墳調査報告書－』　穂高町教育委員会

穂高町教育委員会　1987　『矢原遺跡群（馬場街道遺跡）－県道柏矢町～田沢停線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告－』　穂高町教育委員会

穂高町教育委員会　2001a　『穂高町　一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡　穂高沢水系による開発沢、上原古墳－担い手育成基盤整備事業穂高西部地区に伴う発掘調査報告書－』　穂高町教育委員会

穂高町教育委員会　2001b　『穂高町他谷遺跡－県営中山間総合整備事業あづみ野地区に伴う緊急発掘調査報告書-』　穂高町教育委員会

堀金村教育委員会　1988 『神沢遺跡・田多井古城下遺跡・そり表遺跡』堀金村の埋蔵文化財第１集　堀金村教育委員会
松本市教育委員会　1979 『松本市新村安塚古墳群緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告書No.16　松本市教育委員会
松本市教育委員会　1983 『松本市新村秋葉原遺跡－緊急発掘調査報告書－』松本市文化財調査報告書No.26　松本市教育委員会
松本市教育委員会　1990 『松本市大塚古墳・南方古墳・南方遺跡』松本市文化財調査報告書No.74　松本市教育委員会
三木弘　2011 『古墳社会と地域経営』 学生社
水野敏典　2013 「金属製品の形式学的研究⑤鉄鏃」『古墳時代の考古学４　副葬品の型式と編年』 同成社 pp.63-71
南安曇郡編　1923 『南安曇郡誌』 南安曇郡教育会
南安曇郡誌改訂編纂会　1968 『南安曇郡誌』第２巻上　南安曇郡誌改訂編纂会
吉田恵二、中村耕作、深澤太郎編　2014 『長野県安曇野市穂高古墳群2013年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第50集　國學院大學文学部考古学研究室

報告書抄録

ふ り が な	へいせい25ねんどあづみのしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	平成25年度安曇野市埋蔵文化財調査報告書
副　書　名	穂高古墳群G１号墳（上原古墳）第３次・第４次発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第８集
編 著 者 名	山下　泰永、土屋　和章
編 集 機 関	安曇野市教育委員会
所　在　地	〒399-7102　長野県安曇野市明科中川手2914番地１　　TEL0263-62-3090
発 行 年 月 日	西暦2015年３月31日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	発掘面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
穂高古墳群 G１号墳 （上原古墳）	長野県安曇野市穂高 9783番	20220	2-G１	36° 19′ 37″	137° 51′ 50″	200203 ～ 200204	80㎡	史跡整備
穂高古墳群 G１号墳 （上原古墳）	長野県安曇野市穂高 9783番	20220	2-G１	36° 19′ 37″	137° 51′ 50″	20031020 ～ 20040121	80㎡	史跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
穂高古墳群 G１号墳	古墳	古墳時代	円墳１	須恵器、灰釉陶器、金属器	古墳時代後期の円墳１基を調査、前庭部や墳丘から遺物が出土。

要　約	上原古墳第３次・第４次発掘調査は、上原古墳の保存整備と墳丘及び石室の実測図作成を目的として実施された。この調査の結果、石室内からの出土遺物はなかったが、墳丘裾北西、前庭部及び前庭部西、墳丘裾東の３箇所から故意に割られたと考えられる土器破片がまとまって出土した。これらの土器片には昭和５年（1930）に実施された第１次調査出土土器と接合したものもある。また、第３次・第４次調査で出土した金属製品の保存処理を実施し、処理後の遺物も本書に掲載した。これらの出土遺物の検討から、上原古墳は７世紀前半に築造され、８世紀初めまで数回の追葬が行われたと考えられる。

安曇野市の埋蔵文化財第８集

平成25年度
安曇野市埋蔵文化財調査報告書
穂高古墳群Ｇ１号墳（上原古墳）第３次・第４次発掘調査

発　行　平成27年（2015）３月31日
安曇野市教育委員会
長野県安曇野市明科中川手2914－１
電話　0263-62-3090
編　集　安曇野市教育委員会
印　刷　藤原印刷株式会社